（1）　昭和42年 月24東国特許 昭和40年3月8日第三種郵便物認可（3の日発行）
1972年7月13日　303-304号

☆帝国主義国、後進国、「労働者国家」
三ブロック階級闘争を
世界プロ独—世界共産主義の勝利へ！
共産主義者同盟（戦旗派）

7月13日
毎月3回　3の日発行
303-304号
編集発行人　鹿島　昴
一部　80円
購読料20回1,200円（〒共）

戦旗

戦旗社
東京都千代田区三崎町2—7—6滝沢ビル内電話代
03(264)2961 振替東京 26110
九州 戦旗社 092 63 2418

7月12—13日　日本反帝戦線第三回大会
7月15日　派兵阻止北熊本現地闘争
7月22—27日
8月26—29日　狭山差別裁判高裁糾弾闘争

12—15 九州現地に総結集せよ！

日本反帝戦線第三回大会を圧倒的にかちとり 武装戦闘の不動の地平をうち固めよ！

僅か半年で、しかも一労働党総裁の「近々ポンド切り下げがあるかも知れない」という一言によって、スミソニアン体制の不安定な内実が一気に暴露してしまった。早速、列強の外国為替市場は閉鎖され、英・ポンドは変動為替制に移行せざるをえなくなったのである。「労働者国家」群の存在と後進国武装解放闘争の永続的提携、そして諸列強を覆いつくす腐朽化の一層の深まりがかかる現代世界＝現代過渡期世界にあっては、まさに帝国主義の延命という至上目的のために諸列強代表はすぐにテーブルを取り囲み「当面の打開策」を何とかして打ち出していくのであろう。たとえ、テーブルの下で脛の蹴り合いをして少々の痛い思いをしても。ともかく脛の蹴り合いならば、致命傷にはならないからだ。だが、それにしても、全世界の革命的プロレタリア人民は、一瞬たりとも彼等の挙動を見逃すわけにはいかない。何故ならば、帝国主義のちょっとした動きが、全人民の生活に大きな影響を及ぼすからである。今回のポンドの変動為替制の移行によって確実に円再切上げが近づいたとみなすことができる。ブルジョアジーは国際競争力の低下＝日本資本主義の危機を宣伝し、労資一体となった危機の乗り切りを一層激しく強要してくるであろう。政権交替のドサクサにまぎれてガス代、私鉄運賃の値上げが決まりそうである。更には、郵便、銀行の預貯金利の引下げが本決りとなった。まさにプロレタリア人民の生活は踏んだり蹴ったりである。だがしかし、われわれは目先の不利益にだけとらわれてはならない。帝国主義政治はもっと大きなことを目標にしており、その貫徹のために目先の不利益を強要してくるのだから。共同反革命の再編強化と腐朽化の一層の深化、この基本的動向をしっかりと見据え、あらゆる闘いをこの闘いに結びつけることによって現代帝国主義を攻囲していくことができるのだ。いうまでもなく、この闘いの当面の中心環は、沖縄派兵阻止闘争であり、七・一五北熊本現地闘争を何としてでも勝利的にかちとっていかねばならない。

権力の事後弾圧・諸派の背後からの襲撃粉砕し七月現地闘争へ

ところで、われわれが更なる前進を克ちとっていくにあたって前提的に確認し意志統一しておかなければならない点がある。それは五・一三戦闘の勝利的貫徹を通して切り開かれたわが同盟をとりまく情勢に関してである。

第一は権力のわが同盟に対する弾圧強化の実態である。

佐藤退陣の花道として設定された五・一五沖縄返還式典に対する唯一の革命的「本土」プロレタリア人民の鉄槌としての五・一三神田遊撃戦、この勝利的貫徹は、国家権力の威信に対して決定的な時点で大きな打撃を与えるものであった。

連合赤軍を壊滅させ、アパートローラー作戦をはじめとしたありとあらゆる弾圧によって「過激派狩り」を行い「過激派封じ込め」を豪語した権力に対して、火焔ビンが雨・アラレと降り注がれ、交番・装甲車等が火の海に包まれ、街頭バリケードが構築されたことは、いかなる弾圧の強化をもってしても、闘うプロレタリア人民の武装闘争を押さえつけることはできないことを知らされたものに他ならず、これは権力にとっては大きなショックであったのだ。

そして、そのような闘いが沖縄返還粉砕、沖縄の日米共同反革命前線基地化阻止＝自衛隊派兵阻止沖縄の反革命的統合粉砕を真正面から掲げる「本土」の革命的プロレタリア人民による、沖縄—アジアの闘う人民との国際主義的連帯を目指した闘いとして実現されたことは、二重のショックであった。すなわち「城内平和」をキッパリと拒絶し、雪崩れうつ既成「左」翼の排外主義・一国主義への一層の純化に抗して、確固たる国際主義の潮流が「本土」の中枢において決起したこと、この帝国主義にとってなだめ、すかし、おどし、だきくらかすことのできない部分が、まさに帝国主義者の祝日に足下から決起したことは、沖縄人民の冷やかな態度とともに、帝国主義政府にとっては「許されない」侮辱であったのだ。

だから権力は、「天皇陛下万才」を唱え、感涙にむせぶそのボルテージをそっくり階級的憎悪に転化し、百二十八名の大量逮捕を断行したのである。そして、七十九名の起訴、三〇名の家宅捜索という戦後最高の起訴率による更なる報復と「戦旗派壊滅」のキャンペーン。が、六・九共産同（戦旗派）政治集会の圧倒的成功と七月闘争への前進を誓う強固な意志統一を見せつけられた権力は、報復のエスカレーションを追求し、遂に事後逮捕を開始した。昨年五・二九の外務省突入戦士・江木君を「凶準・公妨容疑」で連行し去ったのである。しかも、権力は更に報復の牙を研ぎすまし、わが同盟の喉元に食いつかんとする動きを示しているのである。

赤軍派と京浜安保共闘の次は、わが戦旗派へと名誉ある指名をなさんとしているのだ。

だが、われわれは、無政府主義を党派性とする赤軍派と熾烈な分派闘争を 闘い勝ち抜いて きたのである。この間の「党のための闘い」の全成果を投入して、五・一三闘争の成果を守り抜き、更に深化していくために、権力弾圧に抗し抜いていかねばならないし、われわれは、自らを打ち鍛えることによって、獄中戦士と固く団結しつつ必ずや勝利するであろう。

しかし、われわれは権力弾圧の実態とともに、遺憾ながら権力弾圧に加担する部分が自称「左」翼の中に存在し、わが同盟への矮小な敵対を試みていることを次に暴露しなければならない。

それは、「本家」＝革マルの真似をすることによって、自らの危機を排外主義的に隠蔽せんとする中核派であるのであり、到底「左翼」とは呼べない明大に巣喰う一部悪質ノンセクト＝マップ（明大新聞会）である。

これらの部分に共通しているのは、自ら全人民的政治闘争としての沖縄闘争を闘えない（学内純経済主義者＝マップなどはそもそも闘おうとさえしない）ことの限界を切開しえないが故に、最も革命的な部分を逆うらみするという倒錯した腐敗分子 であること である。

とりわけ中核派の場合は無惨である。沖縄奪還論の破産がどんな手直しによっても隠蔽できなくなったことは、他ならぬ 中核派が、「この闘いを進めていくうえで依然として決定的なことは、日帝の沖縄政策、"五・一五返還"に対する態度である。これに対する全面的対決、粉砕、拒否、革命的転覆の態度以外はすべて日帝の沖縄政策への屈服であり、敗北主義であり逃亡であり、妥協であり、協力にほかならない」（「前進」五八三号）と返還粉砕派のようなことを口走ったことにも明らかなのだが、とりわけ決定的であったのは、「宮下右派」などといいくるめてきたわが戦旗派が返還記念式典粉砕に決起したのに比して「ともかく闘う左派」が唯一の拠り所であった中核派がこの決定的な時点でカンパニアに逃げこまざるをえなかったことであった。このどうしようもない中核派の理論的・実践的破産がほかならぬわれわれの突出によって鮮明にされたが故に中核派指導部はあわてて われわれの影響力の消去を目論んだのであった。（本紙前々号参照）

そして次には、われわれの理論内容の密輸入を図ったのである。「日米共同の侵略粉砕」なる目新しいスローガン である。だが、それは、われわれの現代過渡期世界論とは全く似て非なるものである。中核派が正しい方向を目指すこと、それがたとえわれわれからの密輸入であったにしても、それ自体は否定すべきことではない。だが、中核派は外見を真似ただけで、何ら「三〇年代へのラセン的回帰論」を否定的に総括していないのであり、奪還論の総括にも手を付けていないのである。これでは全くお話しにもならない。

このような中核派や一部悪質ノンセクト等に見られる、闘ったが故に権力弾圧の矢面に立たされる部分を背後から襲うという利敵行為が平然となされている否定的現実、これらに対してもわれわれは「内ゲバの止揚」を掲げて粘り強く闘い抜いていかなければならないのである。そして何よりも闘いの方向性を明示する道を選ばなければならない。その意味でも七・一五闘争は極めて重要な闘いなのである。この闘いの意義を更に明らかにするために次に若干の注目すべき情勢の進展に触れていかねばならない。

動揺・混乱深める日米両帝

今秋のブルジョア政治過程の基軸が「選挙戦」に収斂されるものであることはホボ明らかであるといってよい。そしてこれは奇しくも日米両帝国主義とも同じなのである。

すなわち、米帝にあっては今秋の大統領選であり、日帝にあっては、自民党総裁選による新総裁＝新首相の選出とその下での総選挙という具合である。

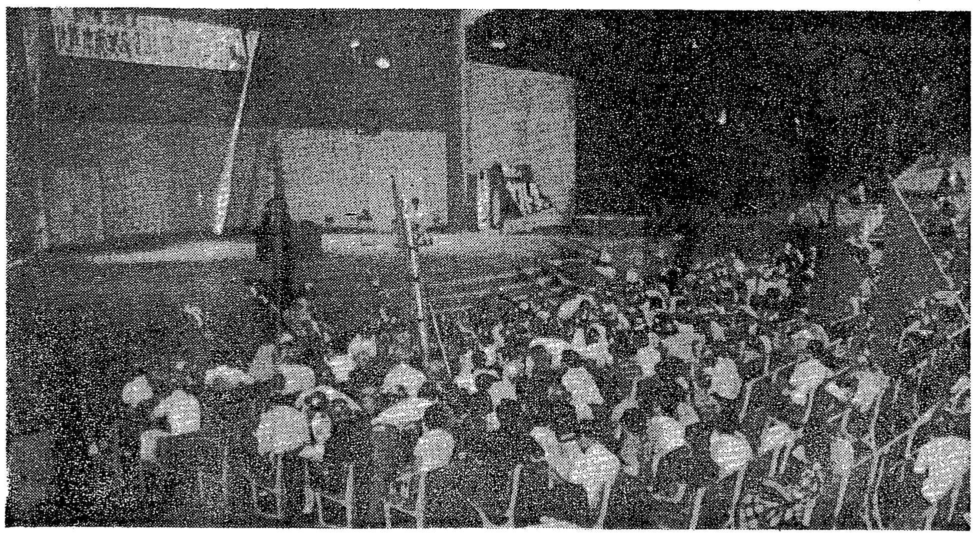
われわれは、このことをはっきりと見越した上で、われわれの闘いの方向性を明確にしていくのでなければならない。

ところで、この選挙戦を迎えていく過程で若干の階級情勢の特徴が読みとれることに注目しておかねばならない。そして、これはまた、多かれ少かれ日米両帝国主義に共通しているといえるものなのである。

一つは、共和党候補ニクソンに対抗する民主党候補の指名予備選における「最ハト派」マクガバンの地滑り的優勢ということに関してであり、他の一つは、「ポスト佐藤」をめぐっての自民党総裁選における、佐藤の後継と目されていた福田の急速な後退・政治的孤立化、すなわち反福田連合の成立ということである。

もっとも、「草の根民主主義」の幻想に依拠しての「反」政府党内部におけるマクガバンの進出と「密室」内での金のやりとりでの反福田派の伸長では、雲泥の差があることはあまりにも歴然としている。とりわけ、優勢を伝えられている田中は政権欲からのみ反福田なのであって佐藤の直系でしかないことはいうまでもない。

（三面へ続く）



七月七日比谷野音に結集した二千名の労学市民は、七・一五軍都北熊本派兵阻止闘争に勝利することを固く意志統一した。

7・7 七・一五軍都北熊本制圧へ 社共・革共同両派の逃亡弾劾し

七月七日、一五日の北熊本現地派兵阻止闘争を一週間後にひかえて、日比谷野音において、「自衛隊派兵実力阻止・北熊本現地闘争決起労働者人民総決起集会」が、二千名の労働者・人民を結集して圧倒的に開催された。

五月一五日の沖縄返還は、「本土」—沖縄の人民にソッポをむかれ、あまつさえ、一三日には、神田武装遊撃戦の革命的戦闘によって、階級的鉄鎚の炎の洗礼を浴びせられたのだ。沖縄返還—自衛隊派兵によってしかその延命をはかることのできない帝国主義者どもは、自らの存在基盤をほりくずす革命的左翼を必死になって圧殺しようとしている。

五・一三闘争を闘い抜いた戦士は、一二八名も逮捕され、しかも六月三日には、七九名もの起訴、三〇名もの家宅捜索という大弾圧を受けたのだ。更に権力はそれにもあきたりず、起訴後一ヵ月間も戦士を警察署に留置したまま、取り調べを強行し、戦士を屈服—転向させようとやっきになったのだ。また、三里塚では反対同盟に更なる弾圧がかけられている（二面参照）。

このような権力のすさまじい弾圧の前に、「左」翼は、ナダレをうって敗走し始めた。社共は、自民党総裁選後の総選挙に没入し、「派兵阻止」を叫んでいた革共同両派は、七・一五闘争を放棄し「全学連大会」に逃亡してしまった。

「返還粉砕・派兵阻止」の正しい路線の下に闘い抜いてきた戦旗プロ独派を中心とする沖共闘のみが、七・一五闘争に決起せんとする否定的現実の前に、「返還粉砕・派兵阻止」潮流の任務は、いよいよ重大になってきている。

集会は、第一部の特別講演から始められた。まず最初に講演された北沢洋子氏は、「マスコミは、インドシナ全土の三分の二にも及ぶ北爆・南爆のすさまじさによって、ベトナム人民の戦意が後退しているかのように、国際情勢がベトナム戦争を規定しているかのように言っているが、これは全くの誤りである。日常生活を営みながらベトナムのジャイホン（解放）をめざし闘っているベトナム人民こそが、世界の歴史を変えているのであって、われわれはベトナム人民の闘いに学ばなければならない」と述べられた。

続いて、五・一三沖縄討論集会でも講演された新里金福氏は「沖縄返還の後、沖縄への差別はますます強まっている。関西では"沖縄人の下宿おことわり"なる貼り紙がなされ、沖縄返還が、分断された民族の"統一"などではなく沖縄の更なる差別・抑圧にすぎないことを、はっきりと示している。沖縄の歴史は、沖縄人民の日本帝国主義への不忠誠の歴史だった。しかしその不忠誠の歴史さえも、沖縄戦を結果してしまった。われわれが派兵を許すなら、再び沖縄戦にいたってしまうかもしれない」と、派兵阻止闘争の重大性を訴えられた。

新里氏の講演に続いて、横須賀の反戦米兵が、熱狂的な拍手の中登壇した。

反戦米兵は「アメリカのベトナム侵略を憎み、それを阻止するため今、横須賀で、ベトナム侵略の拠点・第七艦隊を機能マヒさせるべく闘っているし、反戦米兵への弾圧が日増に強まっている中、良心的徴兵拒否を貫徹し、真の世界平和のために闘う」と、熱っぽく訴えた。

次に、軍事問題研究家の久保氏は、社共の国会における自衛隊の実態暴露の弱々しさを弾劾し、沖縄での派兵阻止闘争は、旧日本軍へのうらみのみでは充分闘えないこと。沖縄へ派兵される自衛隊が防衛庁長官の直轄であることを暴露し、その反革命性と対決しなければならないことが述べられた。

こうして、第一部の特別講演は、インドシナ人民との連帯を明にし、自衛隊の沖縄派兵の反革命性を暴露し、その方向性を提起した。

三里塚・北富士・北海道からのアピールの後、第二部の決意表明に移り、沖青同・反戦派労働者・共産同（戦旗派）・共労党首都圏委・労西評の順で決意表明がなされた。

沖青同の兄弟は、まず富村さんに二年の懲役が下されたが、富村さんはそれを上回る拘留を強いられており、富村さんの奪還に総力を挙げなければならないことを訴え、派兵阻止を叫んできた部分の後退を糾弾し、七・一五軍都北熊本を制圧し、四八時間ストを継続し軍隊の暴虐に抗して闘っている全軍労をはじめとした沖縄の兄弟と連帯して派兵阻止闘争を闘い抜くと高らかに決意表明した。

そして共産同（戦旗派）を代表して登壇した野田同志は、三・一三—一五・三闘争として、沖縄返還を目論む日帝と最も非和解的に闘い抜いてきたわが同盟は、現代帝国主義の腐朽性の深化に対決し革命的祖国 敗北主義を 掲げ、プロレタリア国際主義を更に前進させていかねばならないとして、純プロ経済主義・革マルを鋭く批判し、被抑圧人民との連帯を更に推進させなければならないことを、鋭く提起していった。

沖縄派兵をめぐり、沖縄闘争は更にわれわれの闘いの中心軸として革命的に展開されていかねばならない。権力は、七・一五当日、現地の集会場・熊本城二ノ丸公園の使用を禁止し更に熊大をロック・アウトせんとしている。右翼は権力と結託して、われわれを襲撃せんと身構えている。われわれはかかる七・一五闘争圧殺策動を断固としてはね返し、一兵たりとも沖縄に自衛隊を派兵させないであろう。七・一五軍都北熊本を制圧し、沖縄派兵を断固阻止せよ！

派兵阻止めざし7・15 北熊本現地に決起せよ

全国の闘う労働者・学生・市民諸君！

わが「沖縄返還粉砕—自衛隊派兵阻止」北熊本現地共闘会議より、七・一五派兵阻止現地闘争への圧倒的決起を強く訴えたい。本年三月三〇日以降、北ベトナム軍とベトナム解放戦線のクアンチ省を中心に開始された春季大攻勢によって、完全に米帝国主義のグアムドクトリン、ベトナム化計画が泥沼にたたきこまれた。即ち、米帝国主義がインドシナにおける武装民族解放闘争の勝利的前進の前に敗退を余儀なくされ、六〇年代後半、米帝の政治・経済・軍事的方策の相対的地位の低下が構造化されてきた。それを巻き返えさんがための再編の重要な環であった「アジア人をしてアジア人を闘わしめる」ベトナム化計画が、端緒において破産を宣せられたのである。

かかるアジア情勢に規定されて米帝国主義の極東戦略の再編と日本帝国主義の独自の利害と合致した限りでの「肩代り」が日米共同声明路線としてあったがその急速なる具体化が日米両帝国主義にとって不可欠のものになっている。

沖縄返還はその中軸であり、この返還を通じた沖縄の反革命的統合が、沖縄への自衛隊派兵を頂点として今や生命線となっている。

このような情勢にあって、われわれ現地共闘会議は、今春五月闘争を首都—現地熊本を貫ぬいた真紅の炎で全国を席巻し沖縄プロレタリアート人民・インドシナ三国人民の英雄的闘いに固く結合した国際主義的連帯のささやかであるが貴重な第一歩を踏み出した事を誇りをもって報告したい。首都にあっては、五月一三日沖縄討論集会が沖共闘の出撃の下開催され、先進的労学市民の万余の決起が克ちとられ、神田—お茶の水一帯に火焔の火柱があがり、つづく五月一五日「返還記念式典」粉砕闘争が礫川公園に結集する沖青同・沖闘共闘を中心とした先進的プロレタリアート人民によって圧倒的に闘いとられた。五月一五日礫川公園において現地共闘会議の同志は、今夏—今秋の派兵阻止闘争を意志統一したのであった。熊本現地にあっては、現地共闘会議・現地派兵阻止共闘を先頭とした全九州の革命的部分がプロレタリアート人民が四百人あまりの圧倒的決起を克ち取り、文字通り首都—熊本—沖縄を貫ぬき「返還粉砕—派兵阻止」を闘いきったのであった。

一方、社共＝人民戦線派は、返還の反革命的本質をあばき対決するのではなく、逆に、返還を賛美し、火炎ビン立法に手を貸し、完全にプロレタリアート人民の階級的利害に敵対し、帝国主義の陣営にうつった。更には、「新左翼」の陣だと自認していた革共同革マル派は同じく返還前提論にたち、「本土」—沖縄闘争にことごとく敵対している。今日の労働運動の右翼的再編に断乎とした闘いを組むのではなく、その右翼的労働運動を「本来の戦線」と意味付与し、被抑圧プロレタリアート人民との結合を、「小アトの戦線」として、帝国主義の統合主義に屈服している。

現代帝国主義の腐朽性によって、不断にプロレタリアート本隊がブルジョアジーから買収され、これをもって民族的人種的枠にも及ぶ分断と差別・抑圧が構造化されている。かかる現実にあってプロレタリアート本隊にとって、被抑圧人民・下層プロレタリアートと結合しうる橋頭堡を獲得する事が不可欠の条件である。

にもかかわらず革マル派は、かかる被抑圧人民・下層プロレタリアとの強固な結合を追求する闘いに敵対し、民同の右翼的労働運動の左翼的補完をなす部分以上ではなくなった。

革共同中核派は、「沖縄奪還」を戦略的水路として闘争を続け、昨秋の暴動路線の破産から、一切今春闘争を闘わなかった。このカンパニア主義が破産と共に、もはや「返還粉砕」をかかげなければならないのではないか、といったような内容を、思わず「前進」紙上で吐露し「奪還論」の破産を自己暴露するところまで来ながら、大胆に自己批判を提起することが出来ないというあまりに腐敗・堕落の極にある。革共同両派は完全に人民戦線派の左翼的補完物以上のものではなくなったのである。

全国の全ての先進的戦闘的労働者・学生・市民の皆さん、われわれ現地共闘会議は、かかる「返・奪還」派＝排外主義潮流に大きく水をあけた「返還粉砕」派の最先頭にたち文字通りの死闘をもって今春闘争を闘い抜き、沖縄闘争の永続化を、「返還粉砕—派兵阻止—沖縄の反革命的統合粉砕」のスローガンの下、断乎としておし進め、戦闘体制を打ち固めている。

「返還粉砕—派兵阻止」の圧倒的闘いが、沖縄の自衛隊上陸阻止闘争の昂揚と共に前進する中で、帝国主義者どもは様々な策をめぐらしている。

それは、五・一五施政権返還直後に予定されていた大量派兵をやめ、"さみだれ的・抜き打ち的派兵"をもって、われわれの闘いの鋒先を鈍らせんとする姑息な狙いである。五月二一日の返還後第一陣（第一混成群三一名）、六月一九日の派兵第二陣（第一混成群二五名）といったように沖縄の"さみだれ・抜きうち"派兵が熊本空港よりなされた。

わが現地共闘会議と現地派兵阻止共闘に結集する先進的部分は、かかる姑息な狙いを打ち砕くべく戦闘体制をとり熊本空港に総決集し、果敢な闘いを展開しながらも、帝国主義者どもの狙いを、一定程度許さざるを得ないという状況にある。

かかる帝国主義者どもの今秋を通じた、とりわけ七月一五日を前後する派兵に対する戦闘体制を早急に構築しなければならない。そして、必ずや帝国主義者どもの息の根を止めてやらなければならない。

全国の労働者・農民・学生・市民の皆さん！来る七月一五日、北熊本現地闘争に総結集されんを強く訴える。

沖縄返還粉砕！
自衛隊沖縄派兵阻止！
沖縄の反革命的統合粉砕！

北熊本現地闘団

7・12 13 日本反帝戦線第三回大会

日時　七月一二—一三日
場所　九大教養部 学館

七月一五日
派兵阻止北熊本現地闘争

派兵阻止にむけ北熊本現地に蹶起せよ

6・25 相模補給廠解体闘争 基地前で坐り込み貫徹！

相模米軍補給廠正面ゲート前において機動隊の弾圧をはねのけ断固としてすわりこみを貫徹する反帝戦線

六月二十五日、相模補給廠解体闘争は、およそ八百名の労働者・学生・市民を結集して革命的に闘い抜かれた。

周知の通り、小田急線「相模大野」から国鉄「相模原」駅一帯に広がる米軍「相模補給廠」は、厚木、横田、更に国道十六号線上に結ぶ横須賀と共に、ベトナム反革命戦争の文字通りの後方支援補給基地として、現在操業を続けるきわめて重要な基地である。

ベトナム―インドシナでの米帝軍・カイライ軍の底なしの敗走と時を同じくして、活発化したM48戦車・M113兵員輸送装甲車等の修理活動は依然、相模から横須賀に南下する米軍トラックの連日の疾走として公然と行なわれているのである。

こうした公然たる反革命の隊列に対して、「本土」プロレタリア人民の当然すぎる回答はそれに対する断乎たる痛撃である。

「六・二五相模補給廠解体闘争」はその緊急する任務に応え、神奈川、静岡、埼玉、都内の諸叛軍戦線を結集して唯一闘い抜かれたのであった。ということは、社・共並びに中核派等の沖縄待機派―統合派の一切の闘争放棄、破産に対して、返還粉砕・自衛隊派兵阻止を闘い抜く部分を指導的部分とする諸叛軍、ベ平連等の潮流が唯一決起したということだ。

集会は、国鉄相模原駅裏、頭上を米軍輸送機が低空で飛びかう相模原児童公園で午後一時から、緊迫した雰囲気の中で行なわれた。

会場は、西部地区叛軍、埼玉叛軍、横須賀反軍、三多摩反戦等社会党解放派反軍、ベ平連相模原、厚木基地解体共闘等、二〇団体にも及ぶ戦線の結集で埋められた。

赤ヘル叛軍の戦士は集会で次の様に決意を述べた。「集会は五・一三神田遊撃戦闘の勝利に示される沖縄闘争の前進を最初に静まえねばならない。自衛隊派兵とそれに共同する在日米軍の軍事行動の激化を突進する現実として、転覆する侵略反革命の現実と受けとめリアルに対決しなければならない」と。

更に、全国叛軍の森氏は「この間の基地闘争への一定の立ち遅れを総括しつつ、沖縄闘争との結合をもって本日の闘いを闘い抜き七月派兵阻止北熊本現地闘争に結集しよう」と挨拶した。

また、六・二三より中核派と離脱した第四インターの諸君が当日の集会に参加してきたのであったが、沖縄闘争に対する誤った方針―例えば「屋良支持」等の発言に見られる―の根底的切開が要求されるとしても、K・K連合粉砕に明け暮れる中核派の大衆運動に対する方針の喪失、とりわけ沖縄奪還論の大破産、結果としてのみじめな反革命的孤立を明白に示すものであったのである。

集会を終えると部隊は、ベ平連を加えて補給廠正面ゲートに向ってデモを開始した。デモは、貫徹カー、叛軍の赤ヘル部隊、共産同旗を先頭に道いっぱいになって進んだ。連日米軍用トラックが疾走する国道十六号線は八百名の労働者・学生・市民で埋った。途中、多数の機動隊の規制を受けながらも赤ヘルを中心とする部隊は戦闘的ジグザグデモを展開した。日曜日の午後、それを相模原市民が拍手のうちにとりまいた。

デモは十六号線を基地に進むと、補給廠正面ゲート前に到着した。既に機動隊がゲートを固め、その上には「USA・ARMY・SAGAMI・SUPLING・CAMP」の文字が見える。その前で部隊は機動隊の「警告」をもはねのけ、戦闘的デモを展開し、三〇分以上にわたり坐り込みを貫徹した。爆竹が鳴らされ、周辺は騒然たる雰囲気となった。周辺住民も加わり、反革命基地に対する怒りが完全に覆いつくした。

デモは再び、十六号線に戻り、相模原駅へと向った。そこでも共産同旗は最先頭でひるがえり、赤ヘルを中心とする部隊は戦闘的デモを繰り返した。五時過ぎ、部隊は駅前にて流れ解散し、当日の闘争を終えた。

6・23 右翼―権力の妨害粉砕し 北熊本闘争更に進撃す

【熊本支局】七・一五自衛隊派兵阻止北熊本現地闘争にむけ闘いの波はいよいよ拡がっている。六月二十三日、梅雨の豪雨をついて全九州から結集した労働者・学生は、派兵阻止の熱気に燃えて熊大学館前に集結した。多くの学友の見守る中、反戦労働者共闘会議、九大学友会等の発言に続いて立った北九大派兵阻止共闘、熊本地区派兵阻止闘委、北熊本現闘の同志は「極東反革命体制の巨大な再編期にあって、沖縄の反革命総合、自衛隊派兵に対する闘いが今ほど重要なときはない。そしてこの闘いは、五・一三―一五返還粉砕武装遊撃戦を最先頭で闘い抜いた蜂起・プロ独潮流によってこそ派兵阻止闘争の大爆発として克ちとられるだろう」と力強く訴え満場の拍手で確認されていたのである。

デモ隊は「北熊本の暑い夏」を思わせる青空の下、反帝戦線旗を先頭に出発した。北熊本清水基地ゲート前では、権力―右翼一体となった集会破壊策動を断乎としてはねのけ、派兵阻止への決意表明と自衛隊員へのアピールが続けられた。「神田武装遊撃戦闘のさし示した武装闘争の新たな地平を継承し、さらに発展させ必ずや派兵を爆砕する」と。いよいよ高まる派兵阻止の戦闘的士気満ち溢れる隊列に、ついに国家権力―右翼一体となってなぐりかかってきたのである。集会を終えデモに移ろうとするや、ヘルメットをひきはがし、旗をひきちぎろうとやっきになってきたのである。この攻撃を粉砕しつつ、部隊は再び藤崎宮から市内中心街のアーケードを進撃し花畑公園で総括集会をひらいた。

右翼は終始一貫して日の丸をつけたくわの柄やドスをもって何とかおそいかかろうとしたが、規律あふれる赤ヘルの反撃の前には為す術を知らなかったのである。

全国の同志諸君！兄弟たち！破防法弾圧体制の実質的攻撃という未曽有の弾圧をはね返し、ブント魂のボルシェビキ的気概に満ちた大進撃を克ちとろうではないか。

日帝の軍事外交路線と真正面から対決し、「プロレタリア国際主義」の旗を高々と北熊本に燃えそうではないか。

全ての先進的労働者諸君！学友諸君！七・一五北熊本に総結集せよ！

六・二三　熊大より清水基地へ向け進撃する全九州反帝戦線

北見 六・一六高叛共闘結成す 更に派兵阻止・ミサイル導入阻止へ

【北見支局】全国の先進的労働者学生・高校生諸君！「戦旗」購読者の皆さん！

自称「新左翼」の混乱の中で、六・一六高叛共闘結成大会、六・一七自衛隊沖縄派遣派兵実力阻止・長沼本基搬入実力阻止北見地区総決起集会を「プロレタリア国際主義」「武装闘争」として、その全戦線を自らの存在に体現し、闘い抜いた北見地区反帝戦線よりこの間の闘争報告と、派兵決戦への決意を明かにします。

日帝は米帝の「ドル危機」―極東軍事戦略の改編に伴なって、アジアの侵略反革命の展開として、沖縄返還―自衛隊派兵＝極東反革命の「要石」化策動を展開している。この様な軍事外交路線と国民統合のためのイデオロギー攻撃、労働強度の強化、革命的左翼の解体作戦として現象している日帝ブルジョアジーの攻撃が赤裸々に展開されている。

北見に於ても、この日帝の攻撃に非妥協的な闘いが、六・一六―一七と蜂起プロ独潮流によって、日和見諸潮流を克目に貫徹されたのである。

六・一六高叛共闘結成大会は、これまで北見における高校生運動を展開できず、運動そのものから召還していった反戦高協の破産の確認と、赤色戦線系の諸君の極少な敵対を、粉砕止揚できる唯一の部隊として登場したことを高叛共闘の若き戦士よりアピールがあり、続いて、五・一三―一五全道闘争の最先頭で「札幌地区派兵共闘」と連帯して闘い抜いた北見地区派兵阻止実行委の同志、六・十一―十一長沼本基搬入実力阻止闘争を闘った叛軍行動、赤色戦線系の諸君との党派闘争を勝利的に展開している反帝戦線の各同志より連帯のアピールがあり、大会に結集した四〇名の「若きプロレタリア戦士」が、派兵決戦・搬入阻止闘争へむけて、固い意志統一と大胆な登場を、会場われんばかりの拍手とインターによって確認されたのである。

六・一七北見地区総決起集会は工大の学費闘争をバリストで最後まで闘い抜いた戦闘的ノンセクト・ラジカルを結集して唯一決起したのである。この日、小雨のパラつく中、工大前で集会を貫徹し、その後、デモ訓練で、派兵決戦への更なる意志統一を克ち取り、集会場である市役所前公園へ整然と登場したのである。わが蜂起プロ独潮流は二五名の圧倒的隊列で整然と集会を維持していったのである。

自己の理論の無効に無自覚な赤色戦線系の諸君は、この間「密教化」し続け、この日の集会にレポも来ないという完全召還ぶりだったのであり、中核系の諸君も、ほぼ同様の有様だったのである。プロ統系の諸君は、五名に満たない隊列で、われわれの後について来るのがやっとという風であった。

集会の中で、これまでの特殊北見的階級闘争の限界性を止揚するすなわち、蜂起の陣型構築を展開する派実系の同志より、「プロレタリア国際主義」の内実における諸潮流の混乱の指摘が提起され、われわれには「領土的野心」がない」という革命的祖国敗北主義の立場がより一層鮮明化されたのである。高叛共闘の同志は、矮少な敵対を続ける部分に対して断乎粉砕して方向性を提起し、最後に叛軍行動委の同志が、日帝の野望＝侵略反革命を粉砕する闘いの決意表明ののちデモに移り北見で闘う唯一の部隊と見るや否や、権力は露骨な弾圧を繰り返したが、密集したわが隊列は一歩も譲ることなくデモを貫徹したのである。

6・27 明大学費団交貫徹す！ マップ共闘の敵対はねのけ

【都中部分局】全国の同志諸君！「戦旗」購読者の皆さん！

六月二七日、学費値上げ・二部改悪を目論む明大当局との団交を千数百のⅡ部学生を結集して克ち取ったことを報告したい。アジア派兵を目指す日本帝国主義は、それを支える国内支配体制整備の一環として、教育の帝国主義的再編を推進してきた。中教審答申に見られる、❶教育の多様化を通じた系列化 ❷そのことによる大学の「大衆」化と一部エリートの育成 ❸管理支配体制の強化、の内実こそは、労働力の有効な配置をなしとげんとするものに他ならない。そしてこの答申実現の財政的裏付けとして、人民からの二重取り＝受益者負担の原則を貫徹するものとして国公私立学校の学費値上げが行なわれたし、また同様されているわけである。

ところで明治大学においては、❶学費値上げ Ⅰ❷部改悪 ❸学館閉鎖・ロックアウト等として、中教審路線が先取り的に実現されている。昨年見送られた学費値上げは、受験料の値上げ・再履修料として実質的に推進せられており今年は「必至」とも言われている。また、Ⅱ部は年々定員を減少させられており、神田警察との連絡を取りつつ随時ロックアウトを行なっているのである。

明大当局が予定時刻に一時間も遅れてきたにもかかわらず何ら反省していないことに対する糾弾から団交は開始された。小牧総長、学長の全くもって無責任な回答、あるいは右翼Ⅱ部教育審議長等のⅠ部学生に対する差別発言（「落伍者が多い」「頭が悪い」等）に対しては、結集した千数百の学生がヤジと怒号をもって応えたのである。われわれは明大当局の腐敗しきった姿を暴露し、まさに彼らが中教審路線の尖兵的役割を果していることを明かにしていった。まさしく四・二六―二八バリスト、五・一三田遊撃戦闘を闘い抜いてきたわれわれは、大衆闘争の原則的展開を通してⅠ部におけるヘゲモニー関係を創出すべく闘い抜いてきた。その一成果として六・二二学苑会定期学生大会の成功であり、二七団交だったのである。

ところがわれわれのこの様な原則的な闘いの前に、本校において自己の延命の道を見失った「明治大学新聞会」＝マップ共闘は、今度は和泉地区において、無党派革除策動を画策してきた。即ち、全人民的政治闘争機関としての和泉地区沖共闘があるにもかかわらず、それとは別個に「団実委」を結成し、全人民的政治闘争と学内闘争の分離をもって一切を経済主義的に展開していこうとする、反帝戦線の排除をなさんとしたのである。われわれの原則的追及によって沖共闘の下に「団実委」を組織することが学内諸戦線により確認されていくや本校の闘争団体であることさえもって何とかして生きのびようとしたのである。しかもそれのみではない。われわれの自己批判が提出され、自己の犯罪性が明らかにされるに及んで何を血迷ったのか、学生会中執・第大学集会・Ⅰ教自ボックス等を襲撃・破壊するという挙に出てきたのである。

この間、明大のみならず全国において最も革命的な闘いを展開してきたわが共産同（戦旗派）と日本反帝戦線に対する宗派主義的敵対のみならず、それがまさに大衆運動の分断・破壊としてもあることをわれわれは確認すると同時に、かかる腐敗せるゴロツキ集団＝マップ共闘の、背後からの襲撃を断固として粉砕し、七・一五北熊本闘争を綱領的に成功させねばならない。既に反共同中核派はその大衆性にもかかわらず七・一五闘争から逃亡し、かつての日共の如くセレモニーにおきかえようとしている。

六・二七　明大本校において大衆団交勝ちとる

われわれは一切の日和見主義・学園主義に対する批判をゆるめることなく学内諸戦線の動揺・混乱を早急に克服し、要闘団の結成をもって北熊本に結集する決意である。マップ共闘の如き宗派（ノンセクトとは聞いてあきれる）集団は、この様な闘いの渦の中に没せざるをえない。だがわれわれは批判をやめることなく、明大闘争の勝利のためにも、マップ共闘を粉砕し尽し学内諸戦線との共闘を実現していかねばならない。

全国の同志諸君！七・一五北熊本で共に闘い抜こうではないか！

不当逮捕・傷害致死適用を粉砕し 三里塚青行隊員を奪還せよ

同志諸君、去る七月五日早朝、権力は三里塚反対同盟青年行動隊十一名を傷害致死容疑という名目でつれさり、又、広井国夫君を同容疑で指名手配するという暴挙を行なった。同志諸君、あの昨年九月、三里塚第二次強制土地収用、第二次三里塚決戦はまさしく、六年間にも及んだあの三里塚闘争の中で最も重大な闘いのひとつとしてあったこと。まさしくそれが三里塚闘争の、いや、日本階級闘争の未来を照す闘いとしてあったことは言をまたない。

そしてその三里塚第二次決戦は、わが反帝戦線七戦士を始めとする駒井野砦死守隊の、それこそ死をもおそれぬ英雄的闘いと、そしてそれと結合された遊撃隊によるあの機動隊殲滅戦として、内と外とが固く結合された革命的な戦術の展開によって権力の凶暴なる弾圧、攻撃にもかかわらず、われわれは断固として、屈することなく、その圧倒的勝利をその手におさめたのである。そしてその中にあって、駒井野を始めとする砦の死守戦と有機的に結合された農民・労働者・学生による武装遊撃戦＝機動隊殲滅の闘い、そしてひき出された国家的暴力の執行人＝機動隊三名の死は、まさしくわれわれのプロレタリア解放へ向けた闘いは権力のいかなる弾圧にも、それを倍する反撃でもって答えるであろうということを、と同時にわれわれの七〇年代階級闘争の進むべき道を赤々と照し出したのである。

そうであるが故にかつて日共、社会党そして民同、同盟、さらには革マルと、既成左翼そして中間諸潮流をまんまとかいならした権力は、それらの部分の階級闘争の脱落にもかかわらず、敢然と、非和解的に権力に肉迫する革命のもうし子達の存在と、そしてその闘いに、怖れおののき、なにがなんでも革命の火花を消しとめようと、ブルジョア法の枠をもはみ出しありとあらゆる弾圧を集中するのである。

かつてわが同盟と中核派に対し破防法を適用し、連合赤軍を浅間山荘で壊滅させそして今、五・一三神田武装遊撃戦を諸派の逃亡と日和見の中、断固として貫徹したわが戦旗派に対しあの七九名の実質九〇％の起訴・未成年者の家裁送りそして現住放火五〇名を始めとする無差別重罪適用、そして事後逮捕をもって、わが戦旗派を壊滅させ、革命と武装闘争の火花を消しとめようと策謀する国家権力は、あの三里塚における武装遊撃戦―機動隊三名の死という受けたキズの深さと、その敗北の重大さに昨年来、青行隊を中心に九回にわたり七十七名ものデッチ上げ不当逮捕をくりかえし、そして今回は傷害致死容疑のデッチ上げをもって三里塚青行隊の革命的農民同盟を始め、一一名にも及ぶ逮捕攻撃をかけてきたのである。同志達、まさしくこの攻撃があの昨年九月三里塚決戦の報復であると同時に武装闘争を堅持せんとする部分への弾圧であり三里塚闘争そのものへの圧殺策動、反革命攻撃であるということは明らかである。

全国の同志諸君、農民、学生諸君！傷害致死容疑のデッチ上げを粉砕し一一名の同志を奪還せよ！武装闘争の火花を断固として堅持せよ！三里塚闘争の圧殺を許すな！断固たる反撃を組織せよ！

読者の手紙

前略

五・一三「返還粉砕」「派兵阻止」決戦を唯一革命的に貫徹し切り、その血塗られた旗を更に輝々しく掲げ、敵・権力の未曽有の大弾圧を断乎としてハネ返し、諸党派の日和見主義的潮流・反革命への転落・解体状況を後目に七月北熊本―沖縄の「決戦」を着々と準備し、日々苦闘を続けておられる同盟（戦旗派）そして反帝戦線の皆さんへ心からの激励の言葉を送りたいと思います。

まさにすでに火蓋を切られたこの「派兵決戦」は、日本の左翼の革命的か否か、暴力派か否か、そして同時に沖縄―「本土」の労働者階級・部落民・在日アジア人、ひいては全世界の被抑圧人民の期待を現実と化していくのか、それとも裏切るのかをあまりにも明確に区分し切ったたろうと思います。反革命の暴風の吹き荒れる真只中にあるも、必ずやそれを打ち破り、憎っくき権力・敵階級に容赦なき死の鉄槌が雨あられの如く振り下される日は近いと信じて疑いません。小生も微力ながら、暗き冷たき獄中に権力の拷問を圧倒的に粉砕し抜いている戦士に連帯し、今後物質的・精神的カンパを行なっていこうと考えています。

さて、日帝のアジアに向けて侵略反革命と同時に進行しつつある国内再編の最も重要な環の一つである狭山差別裁判が、今や石川氏に死刑の判決を下さんとし、差別予備軍としての編成を成し切らんとしているのですが、小生も一部落民として糾弾闘争に決起せねばと思い、今また新たに部落問題を整理しようとしている時、丁度戦旗社より「部落解放への飛翔」が出版されているので、それを三部求めたいと思います。現金二千円同封しますから、残りは弾対へ回して下さい。

六月三〇日

山口

一部落民より

五・二九戦士 江木君事後逮捕さる

五・一三遊撃戦を闘い抜いたわが戦旗派と日本反帝戦線に対する弾圧は日増しに強まっている。

七一年調印阻止闘争の口火をきった五・二九外務省突入闘争を革命的に闘い抜いた江木同志が、六月二九日、五・一三闘争における凶準・公妨のデッチ上げによって全く不当に、事後逮捕されたのである。

五・一三戦士を七九名も起訴し三〇名も家裁送致にした権力は、「戦旗派壊滅」のキャンペーンをヤッキになってはきたのだが、わが戦旗派がそのような弾圧をはねのけ、武装闘争の地平を断固として踏みかためているのをイヤというほど見せつけられた権力は、更に弾圧をエスカレートしてきたのである。

しかし、われわれは如何なる弾圧にも屈しはしない。日本反帝戦線第三回九州現地大会と、北熊本派兵阻止闘争を必ずや大成功させることによって、権力に更に痛撃を加えるであろう。

共産主義

一四号　四百円　〒八十円

厚木基地解体共闘

私書箱開設のお知らせ

神奈川県座間郵便局

私書箱三一号

厚木基地解体共闘会議

部落解放への飛翔

討論資料NO1

〔内容〕

部落の解放を克ち取るために

狭山差別裁判糾弾闘争の推進に向けて

「橋のない川」上映阻止運動と

日本共産党の部落解放運動への敵対

部落に対する攻撃の強化

部落の概観

日本反帝戦線中央書記局

定価 100円　〒55円

申込先　東京都千代田区三崎町2―7―6滝沢ビル内

戦旗社

振替　東京 26110

沖縄闘争の革命的展開めざし

■沖縄への自衛隊派兵阻止！

■沖縄の反革命的統合粉砕！

七・一五北熊本現地闘争は、日本革命的左翼の沖縄闘争への関わりの分岐をより決定的に深めるものとならんとしている。すなわち、わが同盟を先頭とする沖共闘系の自衛隊派兵阻止闘争への主体的取り組みと、革共同両派のこの闘いからの事実上の召還。この分岐は極めて重大である。すでに今春闘争は、かかる分岐が根深いものであることを、沖縄返還調印式典粉砕闘争への対応を通して端的に明らかにしたのであった。諸党派の位置ずけの相違はもとより当然だとしても、沖縄闘争が現下の日本階級闘争の最大の環であると把えることにおいては、根っからの経済主義者・革マルを例外としてホボ一致していたといっても過言ではなかったであろう。だがしかし、事実が明らかにしたことは、わが同盟の総力を挙げた唯一の突出的闘いと諸党派の軒並みの召還・逃亡ということであった。それは、まさにこの数年間の革命的左翼における沖縄闘争の意義の内実を凝縮して明らかにしたものに他ならなかったわけである。とりわけそこで確認されたことは、中核派・沖縄奪還論の破産が全く疑う余地のないものとして最終的に明らかにされたことであった。更には革マル派の「サ条約三条破棄を通じての沖縄人民解放論」も中核派・奪還論と運命を共にせざるをえなかったことはいうまでもない。他の党派にあっても実情はこれら両派と大して変わりはしない。まさにこの大きな趨勢が今春闘争においてこの上もなくはっきりとしたのである。七・一五北熊本闘争は、この趨勢を一層顕著ならしめるものとして革命的に闘いとられていかねばならない。そして、この沖縄闘争を通じて形成された分岐・趨勢は、もとより今後の日本階級闘争の方向を全般的に規定するものへと発展させられねばならないし、沖縄闘争はそのような内実を有していることを確認しえるのである。だが、率直にいって、われわれの新地平は、これまでのわれわれ自身の限界の克服を通じてのみ獲得されたものであった。だから、われわれは、この新地平をしっかりと踏み固める作業をまさに五・一三闘争の成果を守り、それを発展させていくことの一環として執拗に推進していかねばならないのである。ここでは、われわれのこの間の沖縄闘争論の深化の要点とまとめを提起していくことにする。

帝国主義と腐朽化について
―沖縄闘争論深化の理論的前提として

これまで確認してきたように、五・一三神田遊撃戦の勝利的貫徹の一主体的契機として、この間のわれわれの沖縄闘争論の決定的転回を挙げることができるのだが、最近の＜転回＞を踏まえた沖縄闘争論の再整理に至る前に、それをもたらしてきたところのイデオロギー的根拠・その意義に関して、先ず若干触れていくことにする。何故ならば、かかる作業を通して、現代過渡期世界に占める沖縄闘争の重大性が一層明らかにしえるであろうし、それはまた直接的に現代帝国主義把握―批判の深化に関わっていくものとなる筈だからである。

沖縄闘争論の「転回」をもたらしたイデオロギー的根拠と意義

それは、われわれの沖縄闘争論↓現代帝国主義論の＜転回＞の契機をなした論文が、その性格上もあって、現代帝国主義論の新たな内容の提起がその根拠とともに、必ずしも十分に明らかにしえなかった点を総括していくことによって明らかにされていかねばならないといえる。

もっと具体的にいえば、それはこういうことである。すなわち、本紙二八九号「レーニン民族理論の総括」論文においては、資本主義の新たな世界史的発展段階としての帝国主義段階という認識をレーニンにもたらす一契機としての民族問題の階級闘争への前面化に対するレーニンの苦闘を歴史的に対象化し、あわせて、それから導き出されたところの「民族自決権の承認」の革命的意義を確認せんとするものであった。

そして本紙二九三号「沖青同・沖縄人民との更なる革命的連帯をめざして」論文における、B革・現代過渡期世界における民族解放闘争の新段階」において、レーニンの時代における民族問題は、現代帝国主義にあってはその腐朽性の深化の一部として構造化されるに至っていることを明らかにした。

更に中央委論文においては、この腐朽性の深化に対する闘いは、これまでわれわれが主要にそれと闘わんとしてきたところの現代帝国主義の共同反革命の再編強化、その具体的発現としての軍事外交路線との対決と不可分一体であることを鮮明に明きらかにしたものであった。またそれは、レーニン「何をなすべきか」的闘いの現在的継承の環を提示したものでもあるわけである。

以上のような、理論的展開の足跡を振り返った場合、われわれがこの間目指してきたことは、レーニンの理論的、実践的闘いを踏まえる中から、現代帝国主義のトータルな把握との関連でわれわれの旧来の政治路線を止揚する新たな方向の提起ということであったことが再確認しえるであろう。まさに中央委論文はその具体的結果であるわけである。だが、ここで問題とされなければならないのは、以上のような現代帝国主義の把握と政治路線的内容提起は、レーニン帝国主義論から大きな示唆を受けることによって可能とされてきたにしても、それは何かしらレーニン帝国主義論理解において不当に軽視されてきた領域としての民族問題腐朽化に再照明をあてることによってわれわれの現代帝国主義論に置きかえうるものではないということに関してである。

すなわち、われわれのこれまでの確認としての以下のような提起は、あくまでも正当なものとして現在的にも踏まえられなければならないのである。

「過渡期世界論はレーニン＜帝国主義論＞が以上のように国際共産主義運動に占めた位置に現在的に相当するものとして提起されんとしたのであった。いわば過渡期世界論は、＜三ブロック＞の成立としてそもそも古典的帝国主義段階とは異なる現代世界の解明をレーニン＜帝国主義論＞のストレートな適用をもってなすのではなしに＜新たな過渡＞のもとに過渡期世界の革命党の戦略を措定する前提として提起されんとしたのだ」（「共産主義」14号P27）

ないしは「現代帝国主義といった場合においても広義には十七年ロシア革命以降の残存せるそれを古典的帝国主義との区別をもって示すことになるのだが、直接的には戦後に延命したそれの呼称とすることにする」（同P30）といった点である。

要するに一言でいえば、レーニン「帝国主義論」は現代帝国主義分析の基準ではあっても、それをもって現代帝国主義論とみなすわけにはいかないということが、あらためて確認されねばならないのであり、その点に関して、第二論文は、若干曖昧性を残したといえる。

そこでは、レーニンの時代における腐朽性とは異なる現代世界における腐朽の深化といった場合のその「深化」の内容とその根拠を解明することが、現代帝国主義論の一課題とされねばならないわけだが、その展開が不十分であったわけである。内容の骨格は明きらかにしたが、その政治経済的根拠の解明が不十分であり、それは、強いては当然にもいかにそれと闘うかという肝腎な点を曖昧なものにさせてしまいかねないが故にここでその点に関して再論される必要があるわけである。

だが、レーニン「帝国主義論」にあっては、そもそも腐朽性の分析が十分になされているとはいえず、そのことが、われわれをも含めて、これまで不当に腐朽性を軽視する傾向に陥ち入らせてきた一根拠をなしてきたといえなくもない。

従って、その点からわれわれの総括は出発せざるを得ないのである。

レーニンの「腐朽化」との闘い―「帝国主義論」の意義とその限界

レーニンは「帝国主義論」において、帝国主義の「五つの基本的標識」すなわち❶生産と資本の集積→独占体❷銀行資本と産業資本の癒着→金融寡頭制❸商品輸出→資本輸出❹資本家の国際的独占体による世界の分割❺資本主義的最強国による地球の領土的分割、を説いたあとで、これが資本主義の特殊な段階を意味するものであることとして総括し、その後、第八章で「資本主義の寄生性と腐朽性」を論ずるのである。

ところで、「五つの基本的標識」と第八章の展開をつなげる第七章において、レーニンは、この「五つの基本的な標識」は、帝国主義の「基本的な純経済的概念」として限定されたものであることを明らかにし、「資本主義一般にたいする資本主義のこの段階の歴史的地位とか、あるいは労働運動における二つの基本的潮流と帝国主義との関係をも考慮に入れるならば、帝国主義を別の仕方で定義することができるし、またしなければならない」（角川文庫版P125）といっている。従って、第八章は、帝国主義の「純経済的」ではないよりトータルな把握のための補足をなしているといえよう。

この補足の意義に関しては、レーニン自身が、後に二〇年に著した「フランス語版とドイツ語版への序文」の中で明きらかにしている。

すなわち「労働運動全体の国際的分裂はいまやすでにまったく明きらかになった……この世界史的な現象の経済的基礎はどこにあるか？」（同P17）ということの解明が第八章だというわけである。

そして、ツアーリズムの検閲の立場からみて合法的たらしめるために「イソップの言葉」で書かれた「帝国主義論」のとりわけこの章は、「この現象の経済的根源を理解するには、共産主義運動ときたるべき社会革命との実践的課題の解決にむかって一歩もすすむことはできない」（同P18）が故に、「帝国主義のきわめて重要な一面」を明きらかにするものとしてとり上げられているのである。

だから、弾圧によって大きく制約された「帝国主義論」の展開の中で第八章は補足的位置を占めるものではあっても、むしろレーニン（＝われわれ）の実践的立場にあっては、単なる補足以上の位置を占めていることを確認することができるであろう。

結論的にいって労働運動における改良主義・日和見主義・排外主義的潮流に対する批判の核心的展開が第八章なのである。

では、その批判が十分妥当であるのか、これが問題である。それはひとまず「五つの基本的標識」との関連如何ということとして総括されねばならないだろう。

レーニンはこの章において「寄生性と腐朽性」の経済的基礎がまず＜独占＞にあるという。しかし「植民地の領有の独占も、これと同じ方向に作用する」（同P一四〇）といいつつ、もっぱら「資本の輸出」に対応した植民地領有との関連で、主要にホブスンに依拠しつつ、寄生性・腐朽性を論じるのである。

諸党派の沖縄闘争からの召還を弾劾し更に反革命的統合粉砕へ

すなわち、植民地領有とそれへの資本の輸出は、植民地における独占的高利潤の獲得を根拠にして金利生活者の階層を異常に成長させることになる。帝国主義国家＝金利生活者国家は、植民地への寄生を強め、軍隊編成までをも従属民族に肩代りさせ、他方、独占的高利潤により労働者上層を買収しおとなしくさせることによって腐朽性を強めるというのである。

だが、このような展開は、資本主義の初期の段階からすでに植民地を領有し、それをもバネとし産業資本的蓄積を成し遂げてきたイギリス資本主義に最も良くあてはまるとはいえ、基本的標識の❶❷との関連を十分に明きらかにするものではないといわざるをえない。もとよりそれは❶❷と「寄生性、腐朽性」が無関連だということではない。そして実は、これは❶❷を分析する際には、主要にドイツ資本主義を例証とし❸に関してはイギリス資本主義を主要に例証とする「五つの基本的標識」のとりあげ方にみられるレーニンに特有の方法に依るところの問題点なのである。

この点に関しては、ここではこれ以上問題としないが、以上のような植民地領有→資本の輸出→独占的高利潤の獲得→金利生活者国家→プロレタリア上層部の買収という脈絡においては、当時最も強力であったとされたドイツ労働運動における日和見主義の発生とその排外主義への転化といった事態とそのドイツ労働運動の指導部＝カウツキーの「背教」への批判は不十分に終らざるをえないことがさし当り総括されておかねばならないのである。

日和見主義的潮流の労働運動内部における台頭を基本的メルクマールとする腐朽化は、もとよりドイツをも例外とするものではなかった。だがそれは、レーニンが明きらかにした金利生活者国家化に依るものとはいい難いのである。むしろそれは、イギリスより後れて資本主義的発展を遂げていったドイツにあっては、イギリスとの競争・対抗上採用されていった金融資本的蓄積にもとずく重工業を中軸とする内的発展に深く関わっていたのである。

金融資本的蓄積による過剰資本の形成は、その投下先を結局植民地に求め、従って植民地をめぐる再分割戦は窮極的には帝国主義戦争の必然性を現実化させるに至るだわけが、そこへ至る最初的過程にあっては、労働運動の高揚を社会主義取締法によって強権的に抑圧しつつ、先進イギリスにおいては容易に採用しえない新たな生産方法を株式会社制度の導入によって採択し、もってイギリスへの競争力を強めつつ急速な発展を遂げていったのがドイツ帝国主義であった。

鉄の生産において、七〇年には僅かイギリスの四分の一でしかなかったのに対して、一九一〇年ではその一倍半という具合であり、総じてドイツ経済の拡大はイギリスの二倍のテンポをもっていたといわれるのである。

そしてこのような急速な生産力の拡大は、九〇年代後半からの景気上昇過程にあっては、労働者の実質賃銀の着実な増大をもたらすものでさえあったのである。

（「ドイツ現代政治史」参照）

かくして植民地の領有による独占的高利潤の獲得を主要な根拠とすることなく、日和見主義的潮流を台頭せしめる物質的基盤がドイツ帝国主義にあっても形成されていったのである。

なかでも、鉄工業における高級熟練工の賃金上昇は、不熟練工や零細家内工業労働者、更には外人労働者等の比較的低位に押さえられる部分との対比においては著しいものであった。しかもかかる傾向を加速するものが、職種別において編成される労働組合の組織力の較差であり、そこにおける労働者政党の指導の誤謬、すなわち経済主義であり、組合主義的政治闘争の展開であったわけである。

「帝国主義は、労働者のあいだでも、特権をもつ部分を分離して彼らをプロレタリアートの広範な大衆からひきはなす傾向をもっている」（同P一四九）ということの内実には、以上のように、いわは、イギリス的な特質と、ドイツ的な特質とがあるのであり、レーニンにあっては、前者の分析によってそれとは相対的に区別される後者のそれに置き換えられる傾向が強かったといわざるをえず、むしろ帝国主義段階における特有な腐朽性は、後者によって与えられていかねばならないといえるのである。

だから、われわれが、本紙二九三号論文において＜腐朽性＞に新たな照明を与えようとし、その概念に関しては、「プロレタリアートの上層部」の買収による労働運動内部における日和見主義の発生ということとしてレーニン的概念に従ったのだが、まさにかかる「現象の経済的基礎」に関しては「帝国主義論」そのものが不十分であることを確認せざるをえないのである。

そして更に、帝国主義把握―批判にとって＜腐朽性＞が特殊に重要な位置を占めるものであることをここで確認しておかねばならないだろう。

資本主義の新たな世界史的発展段階としての帝国主義は、産業資本にとってかわって金融資本がその特有な蓄積様式を構造化することによって画されるものである。

それは特定の市場的条件のもとで、特定の産業が、資本の価値増殖という運動をも規定しつつ、支配的になってきたものに他ならない。

だがその運動は商品化された労働力との結合においてのみ一社会を統制する支配的なものへとなりうる。

そして金融資本的蓄積は、産業資本的蓄積とは異なる労働力支配をもたらすものであったのである

その第一は、原始的蓄積を継続化せずに資本はその価値増殖という運動の目的を達成することになったことである。すなわち、農民層を広汎に残存させることになった。このような後進資本主義国における帝国主義的発展に顕著な事態は、まさに帝国主義段階を画する金融資本の特有な蓄積様式によってのみ説明しうるものである。このことは、金融資本は、自ら包摂しうる階層を景気循環とは相対的別個に固定するものであったことを示す。

第二に、だがしかし、経済的に包摂する階層に対しては、それを馴化せしめ、日和見主義におとしこめることを可能にさせる生産力の増大を一時的にではあれ実現するものであった。

しかし、そのような経済的[illegible]を有するとはいえ、これには極めて労働力の担い手の主体的な要因が絡んでくることはいうまでもない。それは、他方、第一の点からももたらされてくるものでもある。すなわち、金融資本的蓄積から絶えず疎外される中間層・農民層の停滞ということである。もっと具体的にいえば、これらの二点は、金融資本的蓄積は、階層分断を固定化する経済的要因をもつと同時に、この分断を主体的に止揚しえない場合は、一層政治的・社会的分断と対立が被支配階級内部において構造化される傾向を秘めているということなのだ。

しかも、このような関係は、金融資本の世界的支配が貫徹される中において実現される訳であるから、国内における停滞せる農民層や発展的展望を持ちえない中小工業の存在は、そっくり外延的にも拡大するわけである。歴史的に金融資本的蓄積をもっての列強間競争から取り残された諸国は、資本主義的発展の道から外れっ放しにさせられるのみならず、まさに列強の市場支配の餌食にされるだけが唯一の残された道になるのである。

「帝国主義論」において、僅かに触れられる「帝国主義の政治的特性は……あらゆる面での反動と民族的抑圧の強化とである」（同一五五）ということの根拠はまさにかかる階級支配の変質に規定されたものである。

このようなものとして帝国主義をよりトータルに把えていく場合＜腐朽化＞は、極めて特異な位置を占めていることが確認されるであろう。すなわちそれは、帝国主義の経済的特徴と政治的特徴の接点であり、しかも、階級支配の全体的要因と主体的要因の接点でもあるわけである。

レーニンの民族問題に関する革命的対処の首尾一貫性の根拠をその革命的意義を確認してきたわれわれにあっては、帝国主義批判にとってかくも重要なファクターをなす＜腐朽化＞に関してレーニンの提起がたとえその理論的把握において不十分性を残すにしても、真正面からこれを採り上げ、カウツキー批判の活動に据えていくことができたのかは、最早、全く明きらかであろう。

民族問題とは、民族間における政治的特権という一般的問題であり「民族自決権の承認」は、まさに、この特権をどのような民族にも与えず同権を獲得していくことを意味するものであり、レーニンはとりわけ抑圧民族がかかる特権にしがみつくことに対して徹底した闘いを挑んだのであった。

帝国主義は、この民族問題ばかりではなく、前に引用したように「労働者のあいだでも特権をもつ部分」を台頭をさせることになったわけであるが、たとえそれがロシアの労働者にではなく、イギリスやフランス、ないしはドイツの労働者の内部に見られる現象ではあっても、まさにプロレタリア的利害の下への諸階層の統合といった観点から、これとの闘いに挑もうとしたのは国際主義者として当然であった。そしていうまでもなくこの問題の根は一つなのである

だから、われわれが沖縄闘争を契機に帝国主義の民族問題を把え返していくうちに、腐朽化の問題に突き当っていったのも、全く当然の帰結であったわけである。

その革命的意義は「五つの基本的標識」をアレコレとりだして、日本帝国主義が復活したのか否かとか、「従属・自立」論争にみられた「純経済的」にしてそれ自体方法的に全く誤ったこれまでの帝国主義論争、ないしは、帝国主義とは「併合への志向」だから、侵略と闘わねばならないといった一面的な帝国主義把握にもとずく帝国主義批判の枠の狭さを大きく打ち破り、まさしく帝国主義の総体を俎上にのせようとした点にこそあるのである。ともあれ、そのような点を踏まえつつ、レーニンの時代とも異る「腐朽性の深化」として提起した、その深化の内容その政治的・経済的根拠の解明を現代帝国主義論構築の一環として次に若干試みておくことにする。

現代帝国主義の「腐朽化」の深化とその政治的経済的根拠の解明

古典的帝国主義段階と区別して現代帝国主義の腐朽性の特質、すなわちその「深化」を分析していく場合、問題とされねばならないのは、❶IMF体制の成立、❷二次の帝国主義戦争におけるプロレタリアートの敗北、❸民族問題、おおよそこの三点であるだろう。

❸に関してこれまで若干明きらかにしてきたので、まずこれから再整理しておこう。

第一次帝国主義戦争を経る中で後進国旧植民地人民の民族的闘いは全世界を席巻し、第二次帝国主義戦争の終了後においては、帝国主義諸列強は、これらの闘いに対して「政治的独立」を与えざるをえなくなったことは周知の通りである。この闘いとあくまでも対決する限りにおいては「労働者国家」群へと追いやることが現実的に要請される程の強力なものであったからである。かくして、形式的には、「政治的独立」＝被抑圧民族の国家形成は、国家を創出する権利としての政治的同権に諸民族を置くことによって、民族問題そのものは一時的に背後にかくれ、帝国主義と後進国植民地人民との闘いは、より政治的な「労働者国家」群への編入をめぐる問題として争われることになったのであり、それに関しては、現代帝国主義、とりわけアメリカ帝国主義はまさに全世界金融ブルジョアジーの総意を体現してかたくなに防衛せんとしたのである。

これは、後進国旧植民地人民の闘いのヘゲモニーが共産主義者によって代置されていない限りは、その民族運動は帝国主義にとって政治的に包摂する余地が残されていたことを示すものであり、また主体的には、これらの闘いにおけるスターリン主義者による二段階戦略の誤謬にも規定された限界を示すものでもあったのである。

ともあれ、以上の点が民族問題がそれ自体としては国際階級闘争の前面からは退いていった要因であるとみなすことができる。だがもとより現代帝国主義による「政治的独立の承認」は全く欺瞞的なものであり、まして経済的同権などは保証される筈もなかった。

そして「労働者国家」群への帰属を一切認めないところから、それに反革命的に対抗する国家の成立とそれへの援助を民族を分断しつつ成し遂げることによってベトナムを先頭とする民族解放闘争の粘り強い進撃に遭遇することになったのである。そして、この闘いが構造化される中で、現代帝国主義の内部矛盾が、徐々に露呈されていったのである。その先鞭こそアメリカ帝国主義内部における黒人の闘いであったといえる。まさに現代帝国主義は、その内部において、後進国旧植民地人民と何ら変わるところのない政治・経済・社会的位置に固定されている部分の存在を、これらの人民の闘いを通して暴露されたのだ。

しかもそれは、他方「プロ上層部」が単に一部の労働貴族ばかりではなく、民族的、人種的な「差別と抑圧」として拡大・固定化されていることも同時に明きらかにするものであった。すなわち、民族問題は、後進国旧植民地人民の「労働者国家」を創出する闘いと現代帝国主義列強内部の腐朽性の拡大という問題へと形を変えて継続されたわけである。

しかし、これにはやはり、経済的根拠があるわけである。とりわけ、後者は、そのことを抜きにしては解明しえるものではない。IMF体制による現代帝国主義の経済的「発展」がそれである。

これに関しては、これまでも様々に論じてきたので、ここでは詳述しない。

ただ行論との関連で若干触れておけば、IMF体制は、古典的帝国主義段階におけるあからさまなイギリス的な「植民地支配」を継承しえない現代帝国主義にあってドイツ的な発展を外から制度的に保証するものであったといえる。もとよりそれはアメリカ帝国主義が圧倒的な位置を生産力においても金保有においても確保することによって、金の規制を直接にうけずして信用を拡大し、GATTによる貿易の拡大をも補完することによって、可能とされたわけである。そしてその結果は、諸列強の生産力の飛躍的拡大であり、それは労賃上昇をその階層的幅の拡大とともに包摂しうるものであったのである。帝国主義労働運動の物質的基盤はともあれこの二〇数年にわたって拡大され、現代帝国主義の腐朽性の深化の経済的根拠が確保されてきたわけである。

だが、腐朽性の深化はこれだけによってもたらされてきたわけではない。それは、直接的に主体的要因と関連するからである。だから第二の点、すなわち、二度の帝国主義戦争におけるプロレタリアートの敗北が決定的であるということである。この総括はもとより「プロレタリア党」の問題である。しかし一口にこのようにいっても問題は極めて多岐にわたるから一応、戦略論領域に絞るならば、帝国主義―現代帝国主義批判の戦略的要素ということができるであろう。そしてそれはまさにこれまで問題にしてきた＜腐朽化＞論そのものの欠落にあるといっても、余り核心を外れない筈である。

そして、かかる欠落は、帝国主義列強内部にあっては、主要に排外主義的な帝国主義労働運動指導部への「プロレタリア党」の妥協とそれを増長させることにしかならない純プロレタリア革命派、ないしはその裏返しとしての「吉派ザンゲ」的潮流として表れており、後進国旧植民地にあっては「二段階戦略」派として表れており、これらは、まさに、日和見主義の諸相であるといえる。

われわれは「帝国主義の時代には日和見主義者との統一は不可能であるといい、とくに差し迫った問題」（同P一七〇）をレーニンの提言に従いつつ決してぼかすことなく、これらと闘いつつ勝利の大道を驀進せねばならない。

沖縄、部落、入管、保安処分等の課題への取り組みの中に、われわれの党派性は鮮明に刻印されていかねばならないのであり、そしてこの闘いが一方で侵略闘争と他方で労働運動の革命的再生と結合する時、未来は、全世界のプロレタリア解放へと確実に連なるのである。

まさに、沖縄闘争をめぐる諸党派の分岐こそ、この端緒であることを再確認しつつ、沖縄闘争論のまとめを次になしていきたい。

沖縄闘争の更なる前進にむけ
―沖縄闘争論の再整理

五月一五日の沖縄返還から一ヵ月の時日が経過し、日帝による沖縄の反革命的統合が着々と遂行する一方に於て、「本土」―沖縄の沖縄闘争は早急な再構築を迫られている。

日帝による沖縄の反革命的粉砕せよ

実際、県民を頂点とする沖縄既成指導部や社共が沖縄県「知事選挙」の「勝利」に酔い払っている間にも、沖縄の日米共同反革命前線基地化―日帝による反革命的統合は着実に進められた。

沖縄人民にとって復帰とは、第一に経済生活の破壊であった。復帰直前の円切上げと便乗値上げはインフレを耐えられないものとした「本土」資本の進出、交易の拡大は中小資本を退込み、競争力の弱い農業零細企業を追詰めている。石油など公害企業の進出は労働力をほとんど吸収せず、全軍労の首切りと倒産の続出は失業者を増加させている。失業は農村人口を還流にし潜在的失業＝産業予備軍化し、沖縄の労働市場を従事市場にしたのだが、求人は沖縄にはなく殆ど「本土」資本のものであり、しかも中小企業・臨時工などである。この事態は日本資本主義を支える二重構造の完遂を、沖縄人民の「下」層労働への組込みを通して強化せんとするものである。またその結果として沖縄社会・家族の分解・離散を現出し、同時に沖縄窮乏労働者を「基地奴隷」として安定的に確保する条件ともなるのである。

かくして祖国復帰運動が与えた幻想の一つ「日本の援助・進出による沖縄での資本主義発展」の幻想は崩れた。日本資本主義にとって沖縄は資本主義下の対象ですらなく、もっぱら交易による収奪と労働力の供給市場でり、何より軍事基地なのである。

沖縄人民が祖国復帰運動に結集した根拠であった米軍基地（これこそが沖縄産業を阻害し、基地経済を押しつけた）はますます強化されている。自衛隊沖縄派兵と併せ、ますます強化される軍事基地これが第二である。ベトナム解放軍の猛攻に浮足立った米軍はB52戦略爆撃機、艦砲射撃の出撃拠点として沖縄基地をさかんに使用している。

それはここ二、三年来の基地に到達しており基地機能は強化されているのである。しかも自衛隊は「尖閣列島」を含む西南海域を制圧し、中国・東南アジア攻撃の前線基地として沖縄派兵すると共に日米共同反革命下でのヘゲモニーを拡大させ、その軍事能力を補完して、ベトナム敗戦によって後退する米帝の肩代わりを企図している。極東反革命の要石―沖縄は反革命前線基地として固定され、帝国主義の被抑圧アジア人民に対する反革命攻撃の尖兵を永久的に担わされようというのだ。

だが沖縄人民の闘いの前進は帝国主義の恐怖の的であり、その解体を狙う日帝の計画的な攻撃がかけられている。返還の結果は第三に、基地確保と階級闘争圧殺のための強権的統合攻撃として現象化している。❶軍用地確保のための「土地強奪法案」強行採決とその適用、❷機動隊増大、派遣と、公安条例設定の策動、❸教育委員公選など民主的諸権利の剥奪、教職員会・自治労などスト権・政治活動禁止、❹沖縄戦や戦前の日帝と沖縄の関係に関する教育を隠し、神話教育を進める教科書おしつけ等々がそれである。

以上の様に日帝による沖縄の反革命的統合を通した沖縄の日米共同反革命前線基地化の進行は、沖縄人民に対する敵対的性格をますます明らかにしている。そのことは❶そもそも沖縄基地がアジア人民の民族解放闘争や「労働者国家」に対する侵略を目的として使用されてきたこと、❷二十余年にわたる米軍直轄支配が日帝支配に変るがアジア派兵を経済的・政治的に必要としはじめていること、等から当然である。帝国主義者にとっては、従って「基地住民」対策が行届かないとしても、沖縄人民の闘いを、アジア人民とプロレタリア国際主義を以って連帯し、日米共同反革命に対する闘いとして爆発させるのでない社共が自治の名の下に支配下請けを代行してくれるなら一向に構わないのである。

それどころか、五・一五から始まった沖縄統合攻撃に対して、不満をつのらせる人民の目を知事選に集中させた社共はむしろ邪魔な存在になっている。「本土並み反対」を掲げて沖縄の核つき返還を究極目標とし、「本土の沖縄化」が、「本土民主主義」への攻撃につながることをひたすら恐れてきた共産党は、もはや何らの争点をも明らかにできなくなっている。自衛隊沖縄派兵・教公二法案や土地収奪法案にすら一切闘えず、逆に、「教職員の選挙活動」を自民党に攻撃され萎縮する始末なのである。このような統合推進論者の破産はまた、日帝の尖兵と化している点からも明白である。

沖縄返還―自衛隊派兵にかけた日本帝国主義の政治的目標は、直接的媒介的に国際反革命の再編強化を進めることである。第一に死の苦悶を続ける米帝を支えアジア共同反革命を肩代わりする方向に於て、沖縄施政を強化し米軍基地を安定させ、東シナ海周辺を分担する沖縄派兵―派兵である。第二に、沖縄返還を「民族の悲願達成」と評し、更に「尖閣列島」反革命制圧を頂点とするアジア派兵の布石づくりを通して国威発揚、民族的・国家的結集を追求せんとしている。

国際反革命強化の環である自衛隊アジア派兵を実現するには全国民的イデオロギー攻撃が不可欠なのである。第三には被抑圧人民の分断を国民経済強化と一体化して実現することである。差別労働者層の経済的買収―排外主義的労働運動の育成は、その表裏的関係としての二重構造―下層労働者の徹底的搾取をぬきにしては一切語ることができないのである。中小・零細労働者、臨時工、社外工、季節工に対する低賃金、労働強化、首切り合理化、労災、健保改悪、失対打ち切りなどの攻撃は、昨年の通貨調整によって加速されている。

こうした経済的差別が経済構造に固定化され、全般的低賃金構造の温床化する中で対外商品戦争に勝ち残ってきた日本資本主義が、ドル危機によって激化する通商戦争と互恵にひんしたアジア反革命強化めざしたアジア派兵を涼ぎぬくために、そうした被抑圧「下」層人民に対する一層苛酷な搾取を強めざるをえないのである。しかもそうした「下」層労働―産業予備軍が社会的差別とはっきり結びついている。在日朝鮮人・部落民に対する差別をはじめ、予め「上層」には決して加われぬ人民諸層を経済的社会的差別によって固定化しているのである。

沖縄人民に対する差別も歴然としている。集団就職者に対する差別、言語の不自由などを理由とした差別は一例でしかない。そうした差別は無実の罪で青年石川君への死刑判決などのように人民の分断として利用されてきた。経済的基礎をもった社会的差別は、明確に経済的差別をぬきにした差別克服がありえぬことを示してもいるのだ。

かくして、「本土並み返還」を語る社共「沖縄返還運動」の破産は明らかになった。「本土並み」とは、日帝の沖縄人民抑圧を「本土下層」人民並みにするということである。更にアジア派兵にむけた国民統合への加担に於て犯罪的な代物である。

その事は「尖閣列島」問題に於て帝国主義の立場に立った社共に最も完成した姿を見ることができる。しかしプロレタリア国際主義に徹頭徹尾貫かれつつ、とりわけ沖縄闘争を「本土」―沖縄を貫くプロ独政府樹立へむけて闘っている我々は、ここで「返・奪還運動」批判の矛先を緩めてはならない。沖縄闘争を民族主義運動の第五列に落し込まんとする「返奪還運動」批判は日帝による沖縄統合の遂行とそれへの人民の反発の現過程に於てとりわけ重要である。

返・奪還運動の犯罪性と祖国復帰運動の決定的限界

「本土」の「沖縄返・奪還運動」の犯罪性はその政治的役割が、アジア派兵めざす日帝の民族排外主義補完にある事は何度も指摘してきた。だが、文字通り「島ぐるみ」で闘われてきた沖縄祖国復帰運動の大衆的エネルギーを拡散させ、とりわけ現時点の統合過程をむしろ返還前提論を通じて統合推進論者として対応し、統合過程の反人民性に対してそれを隠ぺいしてゆく方向を重点的に批判しなくてはならない。

そのことは結局、「本土」―沖縄階級闘争の統合の前提として日帝の沖縄階級闘争の「本土並み」懐柔を前提的に考える部分と革命的左翼の分岐を示し、統合主義として登場する日和見主義に対して❶「本土」被抑圧人民の総決起による内戦、❷沖縄人民の自決、❸両者が日帝打倒―日米共同反革命粉砕をアジア人民とプロレタリア国際主義的に連帯して闘うことをぬきにしては語れない模範的内容を有する部分とを対決させる筈である。

社共に典型的な本土並み返還＝沖縄闘争の日本資本主義への解消論の犯罪性は、❶戦後日帝の美化・戦前日帝の免罪を通して、本土被抑圧人民との階級的連帯をあいまいにする、❷米軍基地の存続と自衛隊派兵によって拡大する日米共同反革命との闘いが欠落、❸沖縄人民の闘いを一国の枠に封じこめ、アジア人民との連帯を捨象する、等である。それどころか、自衛隊の沖縄派兵「尖閣列島」反革命制圧を容認し、アジア反革命に際して被抑圧人民、沖縄人民を尖兵化せんとする帝国主義を支えるのである。

革マルも同様である。沖縄闘争はオルグの種蒔場にしか考えず、被抑圧人民の自己解放闘争の普遍化に対しては純プロ革命主義から手切りにする革マルはここでも本領を発揮している。❶文部省が戦前戦後を通じ沖縄の教育を疎外してきた事を居直りつつ推進してきた沖大―国際大の統合促進に対して革マルは協力している。❷全軍労スト収拾の先頭に立ったのに続いて全軍労の全駐労への解消の先手となっている。純プロ革命主義者革マルにとっては、部落解放闘争、三里塚闘争、入管闘争、中小企業労働闘争などは「小ブルの戦線」であり関与しなかったのであるが、沖縄人民が返還＝統合に対して闘っているのもムダな抵抗にしか見えないらしい。

サッサと同化して純プロ革命で行こう言いたいのだろうが、こうした論理は日本資本主義の二重構造を利用した差別支配をまるで理[illegible]

沖縄人民の革命的階級への形成を

（六面へつづく）

（五面よりつづく）

もとより考えもしなかった点にこそ問題は求められなくてはならない。沖縄人民の復帰運動、社共の返還運動が米軍政の枠に収まりきれなくなったのを見て〈返還〉に実力闘争を加味したにすぎない安直な発想、人民戦線内左派ぶりをこそ総括しなくてはいけない。「祖国復帰」によっては沖縄人民は救われないばかりか、アジア侵略反革命の尖兵の役割を負わされるばかりという事を明らかにし、日米共同反革命との闘いをこそよびかけるべきなのに、粉砕＝実力返還に革命的解釈を与える復帰運動を美化するとは呆れたものだ。

そうした人民戦線的体質はますます固定化されている。中核はいま「五・一五返還は真の返還ではない」事を証明することにのみ熱中している。「沖縄奪還」の破れ看板はそのままである。もちろん日帝による沖縄の反革命的統合に対する闘いは何ら提起されない。沖縄〈県〉反戦のデッチ上げを一貫して第一義として きた中核。「返還粉砕派は沖縄県民を日本人民から分断するものだ」と繰返してきた統合主義者―中核にとってはそれは当然のことである。

この様に「本土」の返・奪還派の腐敗、統合主義への転落には目を覆うものがあるのだが、沖縄の「祖国復帰運動」に対してはその破産にも拘ず若干評価を異ならせなくてはならない。社共を中心とする指導内容―理念の誤まりは自明であるにも拘ず、その運動を支えた人民の自然発生性は正確に分析されなくてはならない。現実に祖国復帰運動は日本政府に対決してきた。琉球政府首席公選や国政参加選挙への結集よりも劣るとはいえ、自民党に勝ちを与えぬ沖縄人民の意識には注目すべきものがある。だがそれとて手放し賛美はおろか、未だ脆弱なものでしかない事は明らかである。我々が一切の統合主義との対決を重視するのはその内容 に関わりを もっている。

祖国復帰運動が沖縄人民を結集したのは、指導部の反動性を償って余りある 米軍の 苛酷で不自然な沖縄支配の現実であった。この点を沖縄人インテリゲンチャ新川明は、かつて島津藩の琉球支配の苛烈さが 琉支配の八重山では一層増幅された時の八重山指導層の対応（琉球支配の苛政ぶりを島津に直訴し、島津による八重山直轄支配を要請した）を引例しながら「現実の抑圧が苛酷であればあるほど熾烈に、その現実の向こうに一種のユートピアを渇仰する心理的基盤によって民衆は、目前の現実を規定する直接の支配権力の向こうにある社会空間（それがしばしば目前の現実を規定する直接の支配・被支配の関係を、より高く、あるいは深いところで規定している。さらなる上級権力として存在するのであるが）それを楽土として自らの救済願望をここに投入する」と説明する。

実際、沖縄を日本から切離して米軍直轄支配とした根拠である五〇年前後の世界情勢は、国際反革命の利害のためにそうするしかなかったこと、沖縄切捨てには日帝の利害が一致していたことは明らかである。それ故、今日ベトナム敗勢著しい米帝とアジア経済侵略に踏まえ共同反革命強化のために沖縄派兵する日帝の姿は、ここにこそ国際反革命の利害がある点において同一であり、沖縄の経済的社会的苦痛の根源たる軍事基地の存続は日米両帝国主義にとって大前提であるから祖国復帰運動は何らの解決をももたらしはしないのである。そして社共が白々しく幻想を与えた「平和憲法の祖国」は現実の前に幻滅として沖縄人民に映じている。加えて自民は「一体化＝中央直結」を掲げ、日本への忠誠を要求し、祖国復帰運動は解体し分極化している。

この局面に於て「復帰幻想」の幻想から醒め、沖縄人民の過去を見つめる中から模索を始めた沖縄解放運動の潮流に注目する必要がある。その一つである沖縄独立党に関しては地域ブルジョアがその利権確保を求めて反動的に立ち回ったものであり、日帝との取引が成立するや雲消しつつある。他方「沖縄人民権力樹立」を掲げ沖縄文化の検証を第一歩とし闘いを開始した人々の存在は重要である。

そして我々はこの運動が日本帝国主義と最も非和解的に対決する可能性をもつこと、その事は沖縄人民の置かれている歴史的現実的立場を最も鋭く対象化せんとしていることに根拠を有していることを確認しなくてはならない。我々は再度、沖縄人民の自然発生性の分析に立入り、それを生みだした条件を解明して おかなくては ならない。

「沖縄人民権力」論の革命的意義とその限界

日本支配階級による沖縄支配は苛酷な差別支配の歴史であった。まず琉球王国を武力占領した薩摩は人頭税などで搾取を強め、富国の礎石にした。琉球国の形式的独立の保障は対中朝貢貿易のためのみならず、異族意識を根底に抱いており「本土」と異なる高収奪を可能とした根拠となっているのは明白である。

琉球処分も同様である。税制など封建遺制は極端に長く残存させられ、富国強兵の踏み台にされた。従って「琉球処分は民族統一である」とする共産党の主張は誤まりに満ちている。清国に対して西欧なみの待遇待遇を要求し、容れられるならば八重山の割譲すら準備している。ここに於て琉球処分が帝国主義めざす日本の国境画定と対アジア進出の第一歩であり、沖縄を取引材料としてしか考えない事は自明である。

明治政府による沖縄差別は極端なものであった。参政権は与えられず、税は「本土」に倍して高率であり、しかも徹底してモノカルチャ経済（製糖）を押しつけた。しかも沖縄文化、ウチナーグチに対する攻撃、皇民化教育は差別に比例して強められた。明らかに植民地支配の定石―外領人民への支配階級の不信、差別分断、これによる社会的差別の醸成、本国―植民地被抑圧人民の分断支配―が現出している。

昭和に入って経済的差別が表面化した。永らくモノカルチャ経済を押しつけられ、苛税の故に一切の資本蓄積を封じられてきた沖縄経済はパンクし、ソテツ地獄と呼ばれた経済破綻が表面化した。沖縄人民は飢え、一部は「本土」に渡って沖縄人差別を受け、一部は海外に移民し、日帝のアジア侵略の尖兵の役割を担わされた。沖縄差別の克服を日本への同化に求めた沖縄の教育は多くの沖縄人民を日帝に身を寄せさせ、死地に追いやった。

そうした沖縄差別とその産物たる日帝への加担の悲惨は四五年の沖縄決戦に頂点を迎える。差別の克服をアジア人民と連帯して日帝打倒に向うのでなく、皇民として日帝に賭けてもらおうとする運動におちこんだ沖縄人民は、日帝が意図的に選んだ戦場に沖縄本島を提供させられ、民間人多くを含め総人口の半数が死傷させられた。実にである。中国革命の勝利と朝鮮戦争に恐怖した国際反革命のの基地に日米帝は沖縄を選び人民から一切の土地を取上げ、沖縄を踏台として切捨てることによって日帝は独立を回復、逆に沖縄人民は「基地奴隷」・売春婦に象徴される悲惨を味わされるのである。

以上要約した沖縄人民の歴史は沖縄人民に屈折した感情を抱かせ時として祖国復帰運動に結集させ独立運動を少数派として生み出しつつ、自己の立脚点を模索させるのである。そして現在進行する沖縄差別の拡大は、再度、沖縄人民の中から強固な反革命尖兵を生みだす条件ともなりうるし、統合主義者たちが沖縄人民に対する経済的社会的差別を黙認したままにすることが逆に沖縄人民をして個としての差別脱却、帝国主義尖兵への道を歩ませる条件を作ることも明らかである。

差別と搾取の沖縄支配を対象化する中から我々と先進的沖縄人民はいくつかの教訓を得ることができる。第一に帝国主義は人民の分断支配を経済的政治的に有利とし、沖縄人民は植民地的に支配され、日本人民から社会的差別をうけたこと、第二にそれが日本人民支配を容易にし、沖縄人民をして日帝に身をスリ寄せさせ、排外主義の尖兵化させる条件となったこと、第三に「日琉同族論」「皇民化教育」を沖縄教職員会が支え、日帝に動員したこと、等である。

そうした事実は、沖縄人民の解放をぬきにして日本人民の解放がありえぬことを教え、沖縄人民の勝利にとっていくつかの教訓を与えている。

第一に差別＝抑圧に対して沖縄の解放をめざすには決して日帝にすがるので あってはならな いこと。「本土」労働者人民との連帯に関しても日帝と手先による沖縄差別に対して共に徹底して闘うことを要求しないでは絶対に実現されないことである。第二は共闘すべき対象の明確化である。それは抽象的な「本土」人民では決してない。何よりもアジア人民であり「本土」に於て差別と搾取に抗して闘う被抑圧人民であり、それを明確に理解し日帝と闘う労働者階級である。

第三に沖縄人民の多数を反帝の暴力闘争に動員し、米日の反革命基地を粉砕することの必要である。特殊的に 差別支配されて きた沖縄人民は当然にも「自決」の権利をもつのであり、沖縄を、アジア―日本被抑圧人民の闘う連帯の要として、城塞化 する のでなくてはならない。そして、日本プロレタリアートは、沖縄人民に統合＝同化を強要するのではなく、積極的に自決を承認し、統合の前の分離を、帝国主義的野望からの決別を明示しなくてはならない。

このように把えるとき、沖青同などから提起されている「沖縄人民権力論」の意義は明確である。新旧左翼の統合前提論者たちが、沖縄階級闘争がいったん日帝に収束せしめられることを前提化してしまい、犯罪的役割を担おうというのに対して、現実の沖縄闘争は、それが差別支配の上に立つ以上、決して日本ブルジョア民主主義に解消されてはならず、逆に沖縄人民の自己権力をめざそうとしている点は、統合主義に対して鋭い批判を成しており、深く日帝に切り込んでいる。

だがその限界もまたはっきりと指摘しておかなくてはならない。その第一は究極目標の実現に不可欠な経済的解放の方策が明らかでなく、それが日帝からの政治的分離要求の明確化にも拘らず、米軍基地に対する態度の不明さに現われかねないことである。

第二に、最も重大な問題として日帝は決して独立運動を許容しないのであり、それ故、沖縄の闘いと強固に結合した日本被抑圧人民の決起と勝利が不可欠であること、そして日帝打倒後の政治経済体制としては、「本土」―沖縄を貫ぬくプロ独政府樹立がとりわけ経済的に重要であること。日本プロレタリアートと切断した一島解放論の限界が銘記されていないことである。

第三にプロ独を否定しての「人民権力論」が俗流的な権力規定に流れ、沖縄では労農分離が遅れていることが根拠とされていることである。これは日帝打倒―権力奪取以降の政治経済建設上の方向としてのプロ独―社会主義をあいまいにしている。

第四に「尖閣列島はアジア人民のものであり、中国人民のものである」とする主張は、客観的にアジア人民にとって沖縄人民が日帝の一部であるという事実を不問にしている。沖縄人民は日帝に疎外され、抵抗している。だがアジア人民にとっても決定的な分離を創出することには未だ成功していない事実を認めなくてはならないのであり、それ故、沖縄人民に対してその事をはっきりと示し、アジア人民との連帯のためには徹底して日帝の反革命的制圧と闘うことが必要なことを説明しない限り、日帝の「尖閣列島」制圧の尖兵に沖縄人民を使い、被抑圧人民同士を衝突させて高見の見物を図ろうとする策動に対決できないのである。

第五、日帝、国際反革 命の熾烈な闘いを訴えながら世界党―世界赤軍、世界反帝統一戦線の構築の提起が遅れていることである。

このような意義と限界を内包しつつも沖縄人民の現下の闘いに関する提起の画期性は高く評価されなくてはならない。日帝との徹底的対決 にとって 沖縄人民の日常からの徹底分離は絶対に必要なのだ。沖縄人民の闘いの非和解的推進―今、最も問われている内容に応えぬくことが決定的に重要である。

沖縄闘争の非和解的推進と共産主義者の目的意識性

沖縄の現実的運動をあくまで非和解的に推進する ことその中に共産主義者の目的意識性を貫ぬくことは安直には合致しない。だが一点階級形成にとって必要不可欠な内容を正しく提起してゆく原則的視点に立つならば問題の解決の糸口は把める筈である。社共、革マル、中核などの民族主義、統合主義諸派は祖国復帰運動に安直にのっかり、「沖縄問題は解決済み」ないし「本土と同じ土俵に立った」と解釈し、沖縄の反革命的統合や新たな差別に対する闘いからは召還している。こうした渦中は沖縄をブル民の程度に於て「還れた者」とのみ見なし、「本土なみ化」が実現したらもうダウンである。アジア人民、日本被抑圧人民とのプロレタリア国際主義による連帯など一カケラもない彼らに、沖縄人民を革命的階級へと形成していく事業など担えるわけもないのだが。

一方、MLやフロントは沖縄人民の闘いに理解を示したとたん、一切の党派性を失い、先進的大衆に溶解してしまった。こんなのは民の浅さをバクロしたにすぎない。

わが同盟は沖縄闘争における目的意識性を、❶日米共同反革命に対する 闘いが要求 されていること、❷それは「本土」―沖縄を貫ぬくプロ独政府樹立として勝利すること、❸当面日米共同反革命前線基地、日帝による反革命的統合との闘いを自衛隊派兵阻止を頂点としつつ闘うこと、❹その過程で日米帝軍を解体し、正規軍・ソビエト型組織を建設すること、等として表現してきた。

こうした諸内容は最終目標の明確化と、当面する闘いの環の設定に於て卓抜なものであり、沖縄闘争をトータルに把える視点を全階級戦線に提供してきた。だが同時にいくつかの限界も総括しておかなくてはならない。

それは目的意識性が自然発生性と対置され自然発生性の中に萌芽する目的意識性を育成する形では十分に提起されなかったことである。我々は沖縄人民の階級形成をソビエト型組織創出に物質化するものとしたのだが、その内実が不十分にしか解明されず、ともすれば平板な組織づくり一般として理解する傾向をも生み出してきた。「本土」―沖縄階級闘争の結合が強調されその前提である分離の側面が軽視されることも発生した。

こうした諸問題は沖縄差別を一部とする日本資本主義の二重構造に関して、それが固定化され、資本主義発展と共に強化されることはあっても決して解消しないことに対する理解の不足にあった事は既に総括してきた。この解明によって、沖縄人民、被抑圧人民解放闘争の非和解的推進の重要性はますます明らかとなる。日本労働者学生の闘いに合わせて、被抑圧人民解放の闘いを測るのでなく、それらの発展をいかに連関させ、連帯を闘いの中でどう構築してゆくのかここに共産主義者の目的意識性が発揮されなくてはならない。トータルな戦線への部隊配置によって必要とあらば人々にとけこみ共に進むことを通して、全面的政治宣伝と、卓抜な方針提起を実現することがすべてなのである。

かかる観点、つまり統合主義との決定的決別のために我々は沖縄人民の自決権支持を積極的に日本の階級闘争の中に提起し、かつ沖縄での闘いにおいて沖縄の自決を打ちだしていくことを確認するのでなくては ならない。沖縄 人民が「自治政府」あるいは「独立」を打ち出していくならそれを積極的に支持し、日帝と闘うことが「本土」プロレタリアートの任務であり、沖縄人民には日帝支配からの分離が一大任務となるのである。

だが、日本プロレタリアートの勝利をぬきにした「沖縄分離」がありえぬことは強大な日帝を前にして当然のことであり、また日帝からの分離を追及しても国際反革命とりわけ米帝と米軍基地の存在を忘れるのであってはならない。こうした敵を正しく認識し、世界プロレタリアート人民の結合の条件を措定した上で「沖縄人民の自決」を考えるのではなしに、即自的に反日帝でもって「独立」を志向する分離主義の浅薄さには留意しておかなくてはならない。

長い文化・言語・宗教・習慣の相違、独自の歴史をもちながら、徹底的に搾取、抑圧されてきた沖縄人民と真に連帯するために日本労働者人民は完全な同権を保障しなくてはならない。日帝への一元支配は個人への解体、傭兵化を生みだし、支配階級による分断支配を必ず生起するのである。逆に沖縄人民に対する態度ほど、帝国主義―諸中間潮流の統合主義―プロレタリア国際主義の分岐を鮮明に示す問題 は数少ない のである。そして世界党建設をめざす我々にとって、アジアの幾世紀にも亘って抑圧されてきた被抑圧民族の支持をえることができるのか、それとも一国主義―先進国労働組合主義の亜流に転落するのか、その試金石ともなろうとしているのである。

沖縄闘争の最終的勝利が「本土―沖縄を貫くプロ独政府の樹立」世界革命戦争・世界プロ独・社会主義の道にしかないこと、これは自明である。それを切開く闘い、沖縄闘争にプロレタリア国際主義を貫徹し、アジア人民と連帯するためには、沖縄人民の自決と、被抑圧人民の徹底した帝国主義との闘いが重要であることをはっきりと確認しなくてはならない。

こうした闘いの一環として、日帝による沖縄の反革命的統合と徹底対決すること、政治闘争、経済闘争としてそれを実現すること、そして、統合主義者、分離主義者との理論闘争もまた重視されなくてはならないのである。

獄中からのアピール

五・一三神田武装遊撃戦闘を、最も英雄的・暴力的に闘い抜いた戦士諸君に、惜しみない支援と熱い連帯の意を送っていて下さる全国の労働者・農民・学生・市民・高校生の皆さん！権力は五・一三戦士に対して、そしてわが戦旗派と日本反帝戦線に対してますますその残酷な牙をむき出しにしておそいかかってきている。起訴後一ヵ月以上もたつ現在、未だ二四名の戦士が移監もされず、不当きわまりない取り調べを強要され、又、未成年者が、連日の如く起訴処分になっている。そして、六月二九日、七一年五・二九外務省突入を果敢になし遂げ、本年二月戦線復帰をかち取った江木同志が、事後逮捕されたのである。しかし、権力のこのような様々の暴挙にもかかわらず、獄中戦士は全員その闘いの決意をますます打ち固め、連日、せんき社に、決意表明と連帯のアピールを送ってきている。われわれは、七・一二―一三日本反帝戦線第三回大会と、七・一五北熊本現地派兵阻止闘争を圧倒的に克ち取り、獄の内外を結ぶ真紅の糸を、更に赤く、更に強くしていかねばならない。【編集局】

プロレタリアートの息子として闘う
■佐藤 英明

執拗なる権力の弾圧が、獄外においてむしろ顕著であろう現在、同志諸兄の困難なる状況を打破しての救対活動、更には、五・一五以降の大衆運動への果敢なる取り組み、更には六・九共産同（戦旗派）政治集会の圧倒的貫徹と、闘いの報告を眼にし、大きな感動と益々強まる信頼の念を禁じ得ないこのごろです。

獄中での闘いは着実に開始しています。

恒常的な運動と、一層の読書・学習を以って、より強固なる思想性を持った革命戦士に飛躍せん事を宣言し、獄外同志諸兄との闘いの共有のために、敵権力の態意にも、又、笑止千万なる〝起訴状〟を同封します。

以前にも増した弾圧体制、困難なる主体的条件の下、より一層、プロレタリアート人民の良き息子であり、導きの糸である第三次ブントの達々しい飛躍を克ち取られん事を！ 獄中という否定的状況を突破し、共に闘い抜かん事を約して！

菊屋橋署は全員で完黙を貫徹した！
■田中佳代子

あの五月一三日神田解放区闘争を断乎として貫徹し、その後の完黙闘争も、刑事・検事に対して、一言も、私の言葉を権力が聞くことが出来なかったということを報告したいと思います。頭に来ることには、検事は、「ホウ、君は頭で対決するのではなく体力でくるのか」と言って一三回も地検へ護送をするという肉体的な消耗を図ってきたのです。地検では一三回も行ったので〝小隊長〟が普遍化してしまい地検の担当に顔を合わせるたびに「小隊長静かにしろ」とか「オウ小隊長がんばってるか」と声をかけられ、はずかしくなってしまいました。

八時間以上も固いイスので手錠をしたままじっとすわっている。そして調べはわずか一五―三〇分ということの繰り返しの日々でした。しかしながら日頃の組織活動の成果なのか、全く消耗させられず、かえって空気が入りました。時には、面と向ったまま三時間検事とにらめっこ、私は検事の顔を凝視したままピクともしませんでした。とうとう相手の方が根負けしたようです。この状態を一三日間貫徹したので、今は充実感でいっぱいです。

地検に行った時、数人の同志と顔を合わせ、互いに、〝ガンバレヨ！〟〝異議ナシ〟の声をかけ合い、はげまし合いました。とうとう地検では一緒の 人達の間にも〝異議ナシ〟〝ナンセンス〟と〝インター〟が普遍化してしまいました。

又、菊屋橋署において、連日の集会で全員がアジテーションをして決意表明していく、そして、不当な取り調べに対しては抗議していくという様に、互いに互いの完黙闘争を保障していくことを貫徹しました。

現在、東拘内で、自己をきたえるべく、理論学習にはげんでいます。

獄中で自らを律し革命の牙をみがく
■中村 真一

移監してから早いもので一ヵ月近くになります。獄外の様子は「戦旗」誌上でうかがい知る事ができます。五・一三以降、大衆逮捕―起訴という弾圧の中で、苛酷な階級的現実を武装蜂起の勝利に向けて更に一歩一歩追撃してほしいと思います。諸党派の派兵阻止闘争からの脱落―逃亡の中で、階級情勢は今までになく否定的です。唯一、われわれのみが日本階級闘争の未来を担う部分である事は、増々、明白になってきたと思います。全世界をわが手にするために、われわれの双肩にかかる責務は重大です。ボルシェヴィズムをもって、更に党をきたえ上げ、派兵阻止決戦の勝利に向って進撃しましょう。僕も、獄中で自らを律し、革命へ向け牙をみがいていきたいと思っています。

反帝戦線三回大会の成功と、北熊本現地闘争の勝利を確信しています。

獄外の同志と共に七月闘争へ進む！
■三宅喜美代

七月反帝戦線大会から北熊本闘争に向けて、日夜不屈の闘いを展開しておられるすべての同志諸君！ 獄中より革命の炎にもえた熱い連帯の声を送りたいと思います。

五・一三神田武装遊撃戦を断乎として闘い抜いたわれわれに対し権力はその恐怖をむき出しにして今なお不当にも二四名の同志を各留置場に押し込め、引き続き転向・屈服強要の取調べを行なっている。われわれは決してこうした分断・恫喝策動に 屈することなく獄中の厚い壁をつき破り獄外の同志と固く連帯し、権力の実体を暴露してゆかなければならない。

五・一三闘争における大衆起訴に向けたわれわれの闘いを圧殺せんと予防反革命弾圧が、ますます激しくわが同盟にかけられてきている。しかし、これはとりもなおさず、最も良く闘う党派がどこなのかを権力が知っているからであり、われわれは確信を持って、いかなる卑劣な弾圧にも屈することなく、自らを革命的な主体へと高め上げなければならない。一瞬たりとも自己鍛錬を怠ってはならない。まさにわれわれ革命戦士は獄中でこそうち鍛えられるのであり、来たるその日に向けてますます憎悪の炎を燃やしつづけて行こうではないか。

獄中のすべての同志諸君！ 七月闘争にむけた堅い意志統一を獄外の同志と共に勝ちとっていこうではないか。

獄内外を貫ぬく糸で決戦を共に闘う
■大山 孝夫

大衆的逮捕者→拘置者をかかえそして又、日常的な権力による弾圧の激化の中で、苦闘を強いられている事と思います。

私もあの、一三以降権力の庇護下に生活を強いられていますが、獄中―獄外をつらぬく真赤な一本の糸で、今夏―今秋の沖縄派兵阻止決戦を共に闘い抜かんと、更に不退転の決意を日々新たにしています。今諸潮流は、権力の弾圧・攻撃の前に屈服を重ね逃亡を開始しています。唯一、われわれ蜂起プロ独潮流こそが、この日本の労働者人民・プロレタリア人民・被抑圧人民を領導しきる事ができるのです。五・一三の闘い以降、われわれはこの事を明確にしきれたと考えます。派兵阻止決戦は、われわれ、とりわけ獄外で闘っておれる同志諸君に、多くの困難と辛苦をもたらすかもしれませんが、これに断乎として打ち勝ち、共に日本革命、いや世界革命へ向けて進撃していこうではありませんか！

戦火の中で革命の現実性を獲得せよ
■今村 幸一

七月北熊本派兵決戦へ進撃している同志諸君！

僕らがこれまで政治主張においてかかげてきた〝プロレタリア国際主義〟〝組織された暴力〟に恥じない闘いを展開してほしい。戦場をくぐってこそプロレタリア革命の確信と現実性が獲得されるのであり、全世界の闘う人民との連帯の唯一の道であり、また同時に組織は戦争によってこそ強固に打ち固められる事‼組織は権力との闘いの為に鍛えられることを確認せよ！

全ての同志へ！共に闘い共に死のう
■呉丸みどり

全ての同志諸君に対し、現在、不当にも権力の支配下に身をおくことを余儀なくされつつ、にもかかわらず、断乎として、獄中闘争を闘い抜いている多くの戦士の一人として、七月、九州現地闘争へ向けた熱烈な連帯のアピールと、更なる闘いの決意表明を、獄中よりおこなっていきたいと考えます。

現在、獄中において、権力の手により不当にも黒くぬりつぶされ意味不明の所も多い「戦旗」の紙面からは、にもかかわらず、われわれの闘いの成果がはっきりとふみ固められ、受けつがれつつあることが、ますます強く感じられます。

急転する現下の情勢において、かつての第二次ＢＵＮＤの生命線とも言うべき、清算主義の遠隔さと、政治主張のするどさ、そして暴力的な突出力等の革命性を、唯一、正統に継承し、発展させてきた存在であるところのわが第三次ブントの、まさに、新たな前衛党への飛躍をかけた闘いの第一歩としてあった五・一三の地平をしっかりと踏み固め、全ての同志諸君が、七月、再度の九州現地闘争を圧倒的武装闘争の貫徹をもって闘い抜かれることを熱望します。そして、うち続く闘いの炎が、真赤なブンド魂によって領導され、いっそう高く、広く燃え拡がっていくであろうことを信じて、私も今後の長い獄中闘争を、一歩もゆらぐことなく闘いぬき、戦線に復帰する日のため、自らをうちきたえていくであろうことをはっきりと宣言していきたいと考えます。

闘うプロレタリアによって流された血は、敵のうすよごれた心臓から吹き出る二倍・三倍のどす黒い血によってのみ、あがなわれていくのだということを確認しようではありませんか。そして鉄鎖以外に失なうものを持たないわれわれはまた、自らの生をうばいとる以外、なにものものぞまないのだということを―。

勝利の日まで、共に闘い、共に死んでいくであろう、全ての同志、友人達へ。北熊本現地闘争に勝利せよ！

不当起訴はねかえし連日学習を貫徹
■武藤 信幸

救対部の諸姉諸兄をはじめ、全国の闘う同志諸君の期待を裏切ることなく、完全黙秘を貫徹してきました。そしてまったく不当にも起訴になってしまったのですが、獄中に於ても、連日、学習に明け暮れています。

七月北熊本現地闘争へ総力を挙げよ
■菊屋橋 二七号

菊屋橋に勾留されている同志は皆元気で頑張っています。

七月の現地北熊本闘争へ向け、頑張って下さい。

●自衛隊派兵阻止！
●沖縄の日米共同反革命前線基地化阻止‼

権力に憎しみを持って獄中闘争を！
■鈴村 富子

権力の不当逮捕・不当起訴をもって、われわれを同志からひきさき、転向・屈服を目論んでいる権力に対して、憎しみをもって断乎獄中闘争を闘います。

七・一二―一三日本反帝戦線第三回大会勝利‼

七・一五北熊本派兵阻止闘争勝利‼

プロレタリア国際主義の立場から、全力挙げかけて成功させて下さい。

反帝戦線大会と現地闘争の爆発を！
■武藤 信幸

七・一二―一三の反帝戦線大会の圧倒的成功と、七・一五派兵阻止現地闘争の大爆発を確信しています。

起訴後の同志への取調べを弾劾する
■馬場やよい

暑い日が続く今日この頃、戦旗社の同志の皆さんは、きっといそがしい毎日をおくっておられる事と思います。

昨日入った「戦旗」・パンフ等によると獄中同志の三分の一は未だ留置場におかれ、起訴後三週間たった現在も取り調べがつづいていることをはじめて知り、新たなる怒りを燃やしています。

七月現地闘争に主力を注ぎ決戦へ！
■山岸 正和

すべての獄中同志によろしく。

すべての反帝戦線の戦士諸君！ 七月反帝戦線第三回大会、そして、七月北熊本現地闘争に全力を注ぎ、派兵阻止決戦に勝利せよ！

大会へ獄中より闘いの戦列くり出せ
■菊屋橋 九四号

菊屋橋分室女子拘留所より、全ての同志に対して、七月現地闘争連帯と若干の決意表明を行なってゆきたいと考えます。

われわれは七月現地闘争に残念ながら肉体をもって闘うことはできませんが、わが精神は、魂は、あの北熊本を一早く包囲し、火の海で包み、一兵たりとも派兵させないであろうということを、そして第三回反帝戦線大会に結集している同志諸君と一体化して、この獄中より闘いの戦列をくり出すであろうということを表明しておきたいと考えます。今まさに腐ブルジョアジーは、われわれのこの革命的戦いに恐怖し、利害追求を、自己防衛をやっきになってなし遂げようと、われわれに更なる弾圧をしかけてきています。しかしながら「鉄の精神」と「鉄の規律」で鍛えられたわが軍団は、ブルジョアジーとその手先を木葉みじんに粉砕するであろうということを全ての同志諸君と意志統一すると共にブルジョアジーにこのことをしらしめてやろうではありませんか。

全ての同志諸君！

現在、ベトナム人民を先頭に、世界被抑圧人民は、とりわけ沖縄人民はブルジョアジーに対して戦闘的・非和解的闘いを断乎として押し進めています。今やわれわれの獲得したプロレタリア国際主義が真にとわれています。人民の真紅の旗を高々と 掲げ断乎とした戦列を、断乎とした進撃を開始しようではありませんか！

最後に、五・一三戦士は、とりわけ菊屋橋五人拘留組は統一公判を断乎闘い取ることを決意表明し若干ですがアピールにかえたいと考えます。

獄中にあって魂は同志と共に現地へ
■藤井美津江

五・一三から更なる闘いを日々構築している獄外の同志諸君！ そして今なお権力によって拘束されて不当きわまりない取調べを受けている獄中の同志たち！

権力はけっしてわれわれの団結をたちきることはできない。たとえ獄中にあろうとも私の魂は同志と共にあり、現地に向うだろう。

現地北熊本を蜂起プロ独潮流の巨大な怒りのうずでうめつくせ！

獄中闘争貫徹！

派兵阻止！

決戦勝利！

5・13闘争の成果を真紅の隊列へ！
■長堀 雅春

権力の七九名という大量起訴攻撃に対し、断乎、抗議の意を明かにするとともに、僕がもし起訴されたら、この七九名の同志と共に最後の最後まで、公判闘争を闘い抜く決意を明かにしておきます。

執念をもって粘り強く最後まで闘う
■菊池友紀子

すべての親愛なる、そして最も信頼できる同志諸君！

五・一三神田遊撃戦に唯一決起した蜂起・プロ独派、日本反帝戦

ることなく、断乎として完黙闘争を貫徹してきたことをますあらためて報告しておき たいと思い ます。

勝利の前には幾多の困難が待ち受けているでしょうが、わが赤ヘルメットのボルシェヴィキ兵士の闘いによって少しずつ、着実にその勝利が近づいていることをひしひしと感じ、私もまたその一兵士として今現在ここに在ることに誇りをもって、最後まで非妥協的に獄中闘争を貫徹していく決意を固めています。

同志諸君！

勝利をかち取り、この手で人類の真の歴史の第一ページを開くその日まで、共に、悪魔の如き執念と、雑草の如き粘り強さをもって不屈の闘いを続けて行こう！

今後長期にわたるであろう獄中生活を前にして、五・一三闘争の一被告よりの決意表明にかえたいと思います。

日本反帝戦線万才！

反帝戦線三回大会を圧倒的に克ち取り、派兵阻止決戦―北熊本闘争に断乎として勝利せよ！

全ての留置所・監獄を革命の学校へ
■中塚嘉津江

ブルジョア国家権力（法律・裁判所・警察・自衛隊及び膨大な官僚機構）とはまさに人民をだましてまるめこみ、だまされない人々を弾圧・圧殺しようとするのだ。彼等が革命的左翼を圧殺しようと必死になっていることは、とりもなおさず彼等の危機感、われわれに対する恐怖の裏がえしなのだ。いくら必死になっても、ニクソンがついにベトナムからたたき出されていることを見れば、彼等の未来ははっきりしてこようと言うものだ。いかに弾圧しようとも、それはわれわれをより強くすることにしかならない。われわれはすべての留置所を、監獄を革命の学校に変えてしまう。

同志達、手をとりあって前進しよう。われわれが傷つき倒れてもそれを踏み越えて行ってくれ、敵の最後の一兵をたおすまで！

獄舎の鉄柵を打ち砕いて連帯す！
■遠藤ツイ子

日本反帝戦線第三回大会に全国から総結集されたすべての真赤なヘルメットのプロレタリア戦士諸君！ 今、まさにこの日、決戦としての戦いに巣を立たんとする若き兵士に獄中より熱烈な連帯のアピールを送りたい。

派兵拠点である北熊本の地をこの足で踏めぬことは残念でたまらないが、五・一三闘争で切り拓かれた革命的新地平を諸君等が断乎として継承し、発展させていってくれることを確信し、獄舎の鉄柵も打ち砕かんばかりの情熱をもって連帯していきたい。

わが最も信頼できる同志達！

真に左翼たらんと欲する者が何故に権力と闘うことに恐れを抱こうか！

権力との闘いなくして左翼の存在や生き方はないのだ！ 同志諸君！ 権力と闘うことに涙して歓喜せん！

そしてプロレタリア階級を裏切り、姑息にもわれわれに敵対してきている白ヘル下衆（ゲス）野郎＝中核派などには振り向きもせず沖縄人民と連帯し、派兵―上陸阻止闘争を勝利的に貫徹せよ！ 九州の地を、神田遊撃戦闘の数百倍もの炎で燃やし尽せ！ 組織された暴力とプロレタリア国際主義の旗を高々と掲げ、大胆に進撃せよ！

・派兵阻止決戦勝利！
・恒常的武装闘争で闘うぞ！
・蜂起プロ独派は闘うぞ！
・沖縄人民と連帯して闘うぞ！
・獄中闘争を貫徹するぞ！
・デッチ上げ重罪適用・長期投獄を粉砕するぞ！

「獄中よりのアピール」は毎号掲載されます。獄内外を貫ぬいて、更に闘いを前進させよう！